

たヶ谷・猿ヶ馬場)などの小字名がある。古くからある小字名はだんだん消えて、大きい地域の名称(地名)に変わっていく傾向にある。③昔から命名されている小字名について考えてみると、④これはわれわれの先人がその地点、あるいは地区の地理的特性に目を付け、または歴史的事象、あるいは住民の日常生活、仕事等に関連して名付けられたものと考えられる。

⑤地名は多数の先人の合意、了解により長い年月使用されたものであるが故に、われわれとしては逆に地名を通して先人の生き方、地域での取り組みなどを究明することは興味ある問題であると考ええる。

⑥この場合地名の意義について調査しても解明されないものもあり、むしろこの方が数的には多いのであるが、現在一番明確に、網羅的に把握できるのは、町役場備え付けの小字名一覧表であるので、ここにこれを提示する。これはより広い地域との比較考察、より深い人間的営みの究明などが進めば明らかにされる

分野のあることを信ずるからである。

小字名 多賀町役場の税務課備え付け一覧表の一覧表 中に「」書きとして付記したものはある。これは前記したように大きい谷の中の小さい谷は大きい谷の末尾に「」書きで記すこととしてある。一覧表にはすべてを並立的に記していることに注意を要する。

多賀町地図 町史編さん協力委員の協力を得て、現と小字名

在分ける範囲において、町地図に小字名を記入することとした。ところが小字名は町内各所の地区を示すものであるが、明確にその該当範囲を示すことは至難のわざであり、おおよその地域を示すこととして小字名を地図上に記入した。また町内各字の境界も明確にしたいと考えたがこの点も字名を記すにとどめ、その地区境界は割愛した。(別紙六枚の地図として別袋入りとした)。

#### 小字名につ

#### いての考察

「まえがき」で記したように地名は人の生き方、考え方の凝集であるが、考察の加えられる範囲において記述することとする。

#### (1) 歴史の意味があると思われる地名

垣内 中世に防禦を目的として、濠や塀、道

(かいと)で周りを囲んだ集落のことを垣内と言ったが、転じて区画をした道を街道または海道と書いたようである。

敏満寺に平海道、富之尾に海道筋・黒海戸、一ノ瀬に北海道、樋田に下海道、菅原に東海道・中海道。

大君ヶ畑に向カイト・宮カイト、保月に東カイト・北カイト・カイト、水谷に内街道・君街道・北街道・牛街道・よみ街道、藤瀬に寺海道、霜ヶ原に竹海道・靈仙(落合)に上海道、などがある。

#### 東出・西出

これらは垣内と同義語で集落のことまたは本郷に対する通称出郷の意である。

土田に東出・西出・南出・北出、中川原に東出・西出、木曾に東出・西出、久徳に東出・中出・西出、大岡に東出・西出、栗栖に東出・西出、水谷に東出・西出・向出・お城出、八重練に北出・南出、四手に上出、大杉に川原出・出口・西出、一ノ瀬に北出、杉に上出・下出。保月に向出等がある。

土田にある小字名で、その意は土豪の根小屋であったようである。土田の場

合近くに廟所という小字名があり、木立や墓所があった、土豪にまつわる遺跡が集まっていたという。

#### 縄手

長く通った道路を意味しているが、元の意味は古い時代の測地のための幹線(なわもと)がある。「のもと」の読みは各所に残っている。

## 佃

作り田の意。荘園の領主が下人などを  
使って耕作した田のこと。佃川・佃池  
は佃のための川や池のこと、富之尾に残っている。

## コバ

焼畑・切替畑を言い表すのに、コバツ  
クリ・コバキリの語がある。霊仙山に  
牛コバ、萱原に小場ヶ谷・大木場・綿小場がある。集  
落より遠く離れていて、焼畑・切替畑であったと思わ  
れる。

## 塚

塚は多くの場合村境に築かれた。これ  
は塚の祭がしばしば外敵侵犯を防ぐ宗  
教的意義をもっていたと思われる。なお外敵には人間  
だけでない目に見えない悪霊を追い払う意味もあつた  
と思われる。土田に日見塚、桃原、霊仙(落合・今畑)  
に経ヶ塚がある。

## 西の脇

地域の豪族屋敷の西側の地名と考えら  
れる。栗栖・富之尾・仏ヶ後にある。

## 鑄物師谷

芋地谷、大芋谷、小芋地等昔鉄を作っ  
ていた土地と考えられる。南後谷・佐  
目・萱原・栗栖などにある。

## (2) 自然的条件を表す地名

現在の犬上川・芹川は護岸工事がしっ  
かりできていて、川の氾濫はほとんど

## 川原

ないけれども、昔は水の出るたびに川の水筋が変わっ  
たのではないかと思われる。そこで川幅の広い川原で  
あつたろうと思われる。中川原・下川原・前川原・  
上川原・西ノ川原・南ノ川原・向川原などの地域はか  
つて川の中にあつたのであろう。中川原に下川原・南  
川原・北川原・川原田、月之木に南川原、土田に上川  
原・下川原、久徳に前川原・西ノ川原・向川原、栗栖  
に川原田、猿木に東川原・川原端、大杉に川原出、萱  
原に上の川原・野川原等地名として残っている。  
川幅の広い昔の芹川の河岸は段丘として現在も明ら

## 堂殿

寺のお堂または豪族の館のあつた所で  
あろう。堂立・堂前・堂ノ上・堂ノ庭・  
堂谷・堂畑・殿山・殿後などの小字名がある。敏満寺  
に堂立。富之尾に堂前・堂ノ下・殿山・殿後、一ノ瀬  
に堂山・堂辻、南後谷に堂ノ木、大杉に堂谷、栗栖に  
二王堂・堂畑、四手に堂谷、一円に堂谷、八重練に堂  
山、向之倉に堂前・堂下、後谷に堂立、桃原に堂建、  
西堂・薬師堂、杉に堂谷、霊仙(落合)に堂山向・堂  
山、河内に堂ノ上などがある。

## 南代

〔みなみだい〕または「みなみしろ」  
代は「しろ」といい、田地の意または  
田地の単位面積(古代高麗尺六尺平方を歩と言ひ、五  
歩を代と言つた)の意。土田にある。

## 七反坪

坪は条里制で一町四方の単位面積のこ  
と、多賀に残っている。古い時代より  
開かれた土地と思われる。

かにその姿を残している。芹川南側を見ると、大岡か  
ら中央公民館へ通じる道の急坂になっている地点の段  
差、そこから西へ伸びて四手川を横切り、月之木高橋  
と多賀保育園の中間の坂の地点の段差、更に西へ伸び  
て土田称名寺に至り、土田の村の北側を西へ伸び、西  
出の地藏堂の北側の段差、更に西へ伸びて現ブリジス  
トン工場東縁より一町東寄り付近で終わっている。こ  
の段差北側がかつての芹川の河川敷であつたと考えら  
れる。

## 舞台

大きい川の屈曲部または谷の出口部に  
見られる地形である。河川が増水する  
と冠水し、水が減るといち早く露出する土砂の堆積さ  
れた河川敷内の段丘の場合と、山より谷水が激しく流  
出してできた扇状地が考えられる。両者の場合肥沃な  
土壌が堆積して上質の田畑になっている。水谷・栗  
栖・大岡・八重練・一円・土田にいずれも舞台の地名  
が残っている。

舞台によく似た地形で上野(うわの)というのがある。川岸の平らな高い土地で、田畑の耕作、または居住に適する土地である。敏満寺・藤瀬・霜ヶ原にある。河川との関係でよく似た条件でできた、足の入るような泥田をフケという。栗栖・八重練・川相にある。

タワ、タ 降伝いの稜線の中で一段と深く落ち込  
ヲ、トウ んでいる所、山越えに便なる所、峠ま  
たは鞍部と言われている所。タワがあるとこれと関連  
して「タワノ下」の地名も生まれる。霊仙山の汗ふき  
峠の下にある。また桃原や佐目にもある。

## 河内

前・安原)がある。一般に河内とい  
うのは下流から峻岨な山を越え、急流をしばらく上ると  
やや水流の穏やかな地域に達する。そこから上流へさ  
らに上ると、再び激しい水流、急な坂道となる。こう  
した中間的な穏やかな水流や地域を河内と言うとあ  
る。

本町の河内はまさにこの典型を示している。河内の  
東北部、安原の北に瀧谷という小字名がある。これは  
安原より入谷・落合の谷に入ると流・川の急流が多か  
ったことを物語っている。

百々女鬼橋 これは、佐目と大君ヶ畑間にある地  
名・橋名である。百々女鬼は川水がド  
ッドと音を立てて流れる様を表現していると思わ  
れる。このような急流のある谷、その流れにかかる橋  
の意。

## 芝原・柴原

現在は美田となっているが、土田に小  
字名として残っている。敏満寺の古地  
図に柴原と記入されている地域がある。当時としては  
未開地であったのであろう。

右小字名の考案は柳田国男の著書を参考に考案を加  
えたものである。考案を加えるべき小字名、地名がほ  
かに沢山あることと、右考案が必ずしも急所について  
いるとは言えないので、今後の研究に期待したい。

## 多賀町各字小字一覧表

- ・上の仮名書きは呼び方を示し、下の漢字書きは表記を示す。
- ・その他の( )書きは、その地域特有の呼び方を示す。
- ・「」書きは小字をさらに細かく区分した地名を示す。
- ・一部台帳記入以外の通称を付加した。

番号	大字名	ページ
10	多賀	二四〇
9	四手	二四一
8	大岡	二四二
7	八重	二四三
6	桃原	二四三
5	向原	二四四
4	河内	二四五
3	霊仙	二四八
2	甲頭	二五〇
1	屏風	二五一

番号	大字名	ページ
20	後谷	二五一
19	水谷	二五二
18	栗柄	二五三
17	一円	二五三
16	木曾	二五四
15	久徳	二五四
14	久之	二五五
13	月木	二五五
12	中川	二五五
11	土田	二五六
10	敏満寺	二五八

番号	大字名	ページ
30	猿木	二五九
29	川相	二六〇
28	藤額	二六〇
27	富尾	二六一
26	富之	二六一
25	橋崎	二六二
24	一ノ	二六二
23	仏ヶ	二六二
22	桶後	二六三
21	萱田	二六三
20	大杉	二六四

番号	大字名	ページ
39	小原	二六五
38	霧ヶ原	二六六
37	佐目	二六六
36	南後谷	二六七
35	大君ヶ畑	二六七
34	保月	二六八
33	保月	二七〇
32	杉	二七一
31	五壺僧	二七二

多賀

ナシノキ 梨木  
 ナガナワテ 長縄手  
 シノタニ 四之谷  
 サノタニ 三之谷  
 ニノタニ 二之谷

イチノタニ 一之谷  
 ワカミヤ 若宮  
 ヤマノガミ 山之神  
 ミヤド 宮戸  
 コスゲダニ 小菅谷  
 ナカノオ 中之尾  
 ナカノオ 車戸  
 タルマド 赤坂  
 アカサカ 赤坂  
 ウチヤマ 内山  
 オクタニダ 奥谷田  
 カシイケ 貸池  
 ヒジリガシラ 聖頭  
 カミノチヨウ 上之町  
 シモヤシキ 下屋敷  
 ムカイヤマ 向山町  
 チヨウ 町  
 ホンマチ 本町  
 ササヤマ 笹山

シモノチヨウ 下之町  
 シンチヨウ 新町  
 サクラマチ 桜町  
 タニダ 谷田  
 テラヤシキ 寺屋敷  
 キリキン 切岸  
 シンガイマエ 新谷前  
 ココジ 横地  
 イモロギ 飯盛木  
 カスデゾウ 粕地蔵  
 スギタチ 杉立  
 シモキド 下ヶ久道  
 (シモキドウドウ)  
 シモヨコタ 下横田  
 フケ(不毛) 上横田  
 カミヨコタ 上横田

〔堂の森・粕地蔵・木舟〕

17 小字名について

ウチゴメ 打込  
 (ウチゴメ)  
 アマゴチヨウ 尼子町  
 ヨツヤチヨウ 四ツ屋町  
 オカヤマ 岡山  
 ヤマノキタ 山之北原  
 ハラ 山原  
 シンデン 神田  
 カレキ 枯木  
 イチノミタ 市之御田  
 ヤナギマチ 柳町  
 シモサンブ 下三分一  
 イチ 下三分一  
 シチタンツボ 七反坪  
 カミサンブ 上三分一  
 イチ 上三分一  
 注 水印は 尼子領

カワラダニ 桂谷  
 キヤルマタ 藎俣  
 ハネイワ 羽岩  
 コリタワ 郡和田  
 カシハラ 柏原  
 ゲンカ 玄関  
 ヤブタニ 藪谷  
 オオサク 大作  
 サブタニ 寒谷  
 ロクガタニ 六ヶ谷  
 シンギョバタ 新行畑  
 テラダニ 寺谷  
 カミデ 上出  
 キノモト 木之本  
 ロウガタニ 廊ヶ谷  
 タキノシタ 滝下  
 モリショウジ 森小路

ウエノヤマ 上ノ山  
 ツジ 辻  
 キタダイ 北代  
 コワダニ 小和谷  
 オカガシラ 岡頭  
 オビラタ 大平田  
 ウチオバナ 内尾花  
 テラノマエ 寺ノ前  
 ドウダニ 堂谷  
 ニシウラ 西浦  
 ミヤニシ 宮西  
 マトバ 的場  
 フリアイ 古相  
 ラクゾウ 楽蔵  
 ショウズガ 清水ヶ元  
 モト 高畑  
 タカハタ 坂之尻  
 サカノシリ 坂之尻



ケサクマ けさくま  
カドタ 角田  
シロヤシキ 城屋敷  
アオモリ 青森  
オバナ 尾花  
コゴロミ ころみ  
スワ 諏訪  
大岡  
キタウラ 北浦  
ナカタ 中田  
ミチノシタ 道之下  
ニカキ にかき  
インヅカ 石塚  
ケサクマ 落合・湯川  
カゴシ 塚越  
オオオカマエ 大岡前  
イモト 井元  
コゴロミ ころみ  
オオヒラタ 大平田  
タイマル 太丸  
ヒガシデ 東出  
ナカヤシキ 中屋敷  
ニシデ 西手  
ヤマナカ 山中  
ヤママデ 山手  
フトコロダニ 懐谷  
タカツカ 高塚  
ダンベニ 檀平  
タノウエ 田上  
チヨウエン 長円谷  
ダニ 山林の名前  
お城山・小和谷・ニク谷・シヨウ  
キ山・ユズラ谷・扇手(オオギタ  
イラまたはオオギベラ)・下山・笹  
ヶ谷・小由・由の平・アイノ谷・  
滝ノ上・八幡・中尾

八重練  
ミチノベ 道之部  
タカマツダニ 高松谷  
ドウノヤマ 堂之山  
オタニ 尾  
ミナミデ 南  
キタデ 北  
トウジユウ 藤十郎屋敷  
ロウヤシキ (トウヤシキ)  
アマガイ 尼ヶ井  
ジョウゴン 常期溝(補原)  
ムカイガワラ 向河原  
チャノマエ 茶之前(たころ)  
ノセ 野瀬  
ミチノシタ 道ノ下  
キタヒロセ 北広瀬  
ヒロセ 広瀬  
アサハラ 朝原  
ツキミゾ 月溝  
シモフケ 下ふけ  
ウエダ 上田  
インガマチ 石ヶ町  
タケノシタ 竹ノ下  
カミフケ 上ふけ  
アサハラ 朝原  
ツキミゾ 月溝  
シモフケ 下ふけ  
ウエダ 上田  
インガマチ 石ヶ町  
タケノシタ 竹ノ下  
カミフケ 上ふけ  
桃原  
イオダニ 庵谷  
ヒロノ 広野  
ジャレイ 蛇龍  
エボシガタ 烏帽子形  
ホトケガオ 仏ヶ尾  
ナガサカ 長坂  
キリクダシ 切下シ  
アミダミネ 阿弥陀峰  
コヤバ 小矢場  
スギノハラ 杉ノ原  
オノシタ 尾ノ下  
キタバタケ 北畑  
フロノタニ 風呂ノ谷  
カミデ 上手  
ミネヤマ 峰山  
ミネミチ 峰道

コグログミ 小黒組  
 ノ 七 野 瀨  
 ドウダテ 堂 建  
 ヤクシドウ 薬師堂  
 カミイワサカ 上岩坂  
 アカボロ 赤 幌  
 オカ 岡  
 カワトデ 川 戸 手  
 シ デ 四 手  
 フルヤ 古 屋  
 シモイワサカ 下岩坂  
 オンバジ 音羽地  
 ニシノグチ 西野口  
 ヒガシノグチ 東野口  
 ショウエン 正 円  
 トウザイタクウ 東西空

ノ ナカ 野 中  
 ムカイガワ 向 側  
 ツルバヤマ 鋸 刃 山  
 カワクボ 川 窪  
 タキダニ 滝 谷  
 ゴンスケ 権 助  
 ダキイワ 抱 岩  
 タキノミチ 滝 道  
 サイドウ 西 堂  
 ココミチ 横 道  
 ホラ 保 良  
 ホネサカ 骨 坂  
 キドウラ 木 戸 裏  
 ノグチ 野 口

向ノ倉  
 キナイバタ 木内畑  
 シモカツラ 下カツラ  
 カミカツラ 上カツラ  
 タスキアナ 狸 穴  
 ナカオ 中 尾  
 ビシヨクラ 比 倉  
 シヤレバタ 中 畑  
 ナカバタ 中 畑  
 ヒガシダワ 東 畑  
 ニシダワ 西 畑  
 ノボリオ 登 尾  
 キタグチ 北 口  
 タイラ 平  
 ミネ 峰

ナカジマ 中 嶋  
 ヒガシダン 東 反 尻  
 ジリ 東 反 尻  
 ドウノマエ 堂 前  
 セ ド セ ド  
 ニシタンジリ 西 反 尻  
 ドウノシタ 堂 ノ 下  
 カ ケ カ ケ  
 ジゾウヤマ 地 蔵 山  
 マニサカ 前 坂  
 オオツル 大 罫  
 ウエサカ 上 坂  
 オオマワリ 大 廻 り  
 サカノナカ 坂 ノ 中  
 サカノシタ 坂 ノ 下

ムカイサカ 向 坂  
 ヒガシホリ 東 堀  
 ニシヒラ 西 平  
 オ 尾  
 ハカダチ 墓 立  
 サイワイダニ 幸 谷  
 (クワダニ) [山ノ神・オダテ]  
 ニシホリ 西 堀  
 アテハス アテハス  
 ヒロノ 広 野  
 河 内  
 オクヤマ 奥 山  
 ナベジリ 鍋 尻  
 ハチヤクボ 八 手 堀  
 イワミズ 岩 水

ヨコミチ 横 道  
 カミテヤマ 上 手 山  
 ツツサコ ツツサコ  
 クロオ 黒 尾  
 エクチ エクチ  
 ムカイビロ 向 屏 寺  
 ウジ 細 畑  
 ホッパタ 灰 竈 向  
 ハイガマム カイ 地 蔵 ノ 後  
 ジソウノウラ 地 蔵 ノ 後  
 ヨコバタ 横 畑  
 タテミチ 立 道  
 トウゲ 峠  
 ウツロ 宇 津 呂  
 ヤマノカミ 山 ノ 上  
 ビヨウジ 屏 寺  
 ナベジリミチ 鍋 尻 道  
 ハタジリ 畑 尻







アスダニ	浅谷	カミニシノソワ	上西之組	ミソノムカイ	溝ノ向
シモガワラ	下川原	ハナクラ	花倉	タハタ	ハ
カゲタニ	陰谷	チョウシ	丁子	ノグチ	野口
サンボウ	三寶	ビョウブ	屏風	ウエノ	上野
ホウサク	宝作	トウゲ	峠	ノジリ	野尻
クリザコ	栗佐幸	オク	奥	ソワ	組
ホリハタ	ホリ畑	ソンチュウ	村中	スギヤマ	杉山
アンジャク	安若林	シタデ	下	クラシタ	倉下
ナカ	中尾	タニ	谷	クラシタ	倉下
シモツクラ	下津倉	カゲタニ	影谷	後谷	
イドノタニ	井戸ノ谷	シモダニ	下谷	クラシタ	倉下
井戸	井戸	サメガイミズ	醒井水	ニシノソワ	西ノ峽
戸ノ上	戸上	シモノジゾウ	下ノ地藏	ソリ	曾利
トノウエ	トノウエ	トビオクラ	飛尾倉	コシヤク	小杓
ニシノソワ	西之組	ウオツリ	魚釣	ビョウジ	屏士
		カゲゾワ	影組	タニバタ	谷畑

少カヒロノ	中カヒロノ	モンノソラ	モンノソラ	コウタニ	甲谷
コサイラク	コサイラク	コタニヤマ	小谷山	リボタヤマ	〔高取城・タカトリボタヤマ〕
コクラオ	コクラヲ	トチダニ	トチダニ	ハナシ	ハナシ
マルツカ	マルツカ	カワイダニ	河合谷	トチノコ	トチノコ
ヒトツキ	ヒトツキ		河井谷	ヤハダニ	矢張谷
ノタノロ	ノタノロ			オクコウズ	〔ホソザコ〕
ジゾウノウラ	地藏ノ後	甲頭倉	高畑	タラ	奥甲頭倉
クラノヤマ	クラノ山	サルガヤマ	〔クロオ・チヨシ〕	ノ	〔ヨノキザコ〕
サカアセ	中アセ	カミガワラ	上河原	ヤノハヤシ	野田
オクノラヤマ	ヲクノ山	キリハタ	切畑	コタニグチ	〔マルオ〕
イルタニ	イルタニ	イバ	伊場	カミサコ	〔シノノシタ〕
アセハラヤマ	アセハラヤマ	ワキノタニ	脇ノ谷	イドヤマ	〔オチバ〕
コクラ	コクラ		〔リンドウ・雨コイ山〕	ノ	〔マクワ〕
ケヤキザカ	ケヤキ坂			野瀬	
ミズタニグチ	水谷口				
スミノヤマ	住山				
カワニシ	河西				

マルオ	コタニ	オオタニ	シモタチ	ニシノカミ	カミデ	オオムカイ	シモデ	アリイモト	イワス	カミタカヤ	タカヤ	クリシヤク	ホリヘタ	モモシヤク	シモツクラ	タニノタニ
丸	小	大	下	西	上	大	下	有	岩	上	高	栗	堀	桃	下	谷
尾	谷	谷	立	上	出	向	出	元	ス	ヤ	ヤ	杓	ヘ	杓	津	ノ
													タ	倉	谷	

トウゲノワキ	イブキ	トウゲノワキ	ニシノミネ	ハカノモト	オノウエ	スケジロウ	ヒガシソワ	クボ	カゲソワ	アマゴイ	ドウノウエ	イワクラ	キタデ	ヤイ	マルヤマ
峠	伊	峠	西	墓	尾	助	東	久	影	天	堂	岩	北	八	丸
ノ	吹	ノ	ノ	ノ	上	次	峽	保	峽	乞	上	倉	出	井	山
協		脇	條	本		郎									

ウチカイドウ	タキノウエ	スケト	ノボリオ	イズミタニ	ウエノヤマ	ヒガシデ	ムカイデ	バシロウメ	クボタ	カゲタニ	ウシカイドウ	シボウ	マメトジ	アラオトシ	水
西	内	貫	登	泉	上	東	向	葉	久	陰	牛	四	豆	荒	谷
出	街	戸	尾	谷	山	出	出	正	保	谷	街	坊	閉	落	
	道	上						目	田		道		開		

チメダニ	イワガタニ	ゴゾウノワキ	オオジロ	イワノワキ	モンノウエ	ミネノタニ	キタカイドウ	シラスガワ	アズマドウ	ゴイダニ	ワキ	キミカイドウ	ワキノヤマ	カマガタニ
知	岩	地	大	岩	門	峰	北	白	東	五	君	脇	脇	鎌
目	ヶ	蔵	城	ノ	ノ	ノ	街	須	道	位	街	道	山	ヶ
谷	谷	ノ	城	脇	上	谷	道	川	道	谷	道	道	山	谷

リヨウシヨ	ナカジャク	オダイラ	スギノシタ	ヨコガケ	ミズタレ	ミズホリ	ミズクミ	オオタニ	カニガタニ	イチノタニ	トビノキ	ナツハラ	イワシタ	ミチノベ	コイモジ
領	中	尾	杉	横	水	水	水	大	蟹	一	飛	夏	岩	道	小
所	尺	平	ノ	掛	垂	堀	汲	谷	ヶ	ヶ	ノ	原	下	之	芋
											木			部	地

ソ	ニホンギ	ニオウドウ	ニシノワキ	タキガハナ	アマガイ	イワシタ	タニグチ	ジンデン	ハマグリタ	ユスラ	イチノワタリ	マルヤマ	マルワ	ヨモダニ	ハヤシ	コワダニ
	二	二	西	滝	尼	岩	谷	神	蛤	ユスラ	一	丸	丸	四	林	故
	本	王	ノ	ヶ	ヶ	ノ	口	田	田	ス	ノ	山	輪	方		和
	木	堂	協	鼻	井	下		田	田	ラ	渡	山	輪	谷		谷

ワンザカ 楠 阪  
 プタイ 舞 台  
 スイダニグチ 水谷 口  
 フチノカミ 淵ノ上  
 サンジョウウ 三條 阪  
 ザカ 小 谷  
 オダニ 榎 谷  
 エノキダニ 岩ヶ谷  
 イワガタニ 大芋 地  
 オイモジ 大芋 地  
 一 円  
 アマガイ 尼ヶ井  
 カキハラ 柿 原  
 ツバキハラ 椿 原  
 ブタイ 舞 台  
 ヒガシカド 東 角  
 ニシカド 西 角

ナカショウジ 中小 路  
 ワカミヤ 若 宮  
 オクデ 奥 出  
 ヤマワキ 山 脇  
 ヤマダグチ 山 田 口  
 ニシダニ 西 谷  
 ヒガシダニ 東 谷  
 セトガダニ 瀬戸ヶ谷  
 木 曾  
 ハナマル 花 丸  
 ヨコタ 横 田  
 フクボ 福 坊  
 ホリキリ 堀 切  
 ヨウズイ 用 水  
 ナカデ 中 出  
 ニシラ 西 原  
 カニガイト 蟹ヶ糸  
 ニシダ 西 出  
 ホソダ 細 田  
 ヤケヤ 藪 田  
 ヤナセ 藪 田  
 カモモ 加 茂  
 月之木 野 神  
 ノガミ 南 川  
 ミナミガワラ 南 川  
 シングウ 新 宮  
 クボ 久 保  
 シガク 新 楽

ニシバタ 西 畑  
 ムラマエ 村 前  
 ヒガシバタ 東 畑  
 ニシデ 西 出  
 タニダ 谷 田  
 サイドウジ 西 導 寺  
 ウエハタ 上 畑  
 イケダ 池 田  
 ヒガシデ 東 出  
 カエダニ 通 谷  
 マエヤマ 前 山  
 ヒガシダニ 東 谷  
 ニシダニ 西 谷  
 シガタマエ 新 楽 前  
 カタロク 角 六  
 シモホソダ 下 細 田  
 ホソダ 細 田  
 ヤブタ 藪 田  
 カネコマエ (カネコマエ) 金子 前  
 中川原 東 出  
 ヒガシデ 東 出  
 シンジョウ 新 庄  
 ニシデ 西 出  
 シモガワラ 下 川 原  
 アラバリ 荒 張  
 ヨコタ 横 田  
 [善助山・西ノ沢]  
 [岩見の奥]  
 [ツキダシ・荒は]  
 [下栗栖・塚木]  
 [西生寺]  
 [深田・葉師・ちかん]  
 [丸岡・割山]  
 [割山]  
 [瀬戸山]  
 [蛇ノ尾・半介地]  
 [屋敷田]  
 [山田・照蓮寺]  
 [ひろぶち・堀]  
 [樋越]  
 [東出・中小路・北川原]

タキダニ 滝 谷  
 ウエノ 上 野  
 曾 我 東 出  
 小林 西出・川東・川西  
 久 徳  
 ヨツガワ 四ッ 川  
 アサハラ 朝 原  
 クビキリイ 首切 井  
 サンブイチ 三分 一  
 マエガワラ 前 川 原  
 ニシガワラ 西 川 原  
 シモダ 下 田  
 オオミチ 大 道  
 マツノモト 松ノ 木  
 ヒガシデ 東 出

ヨウズイ 用 水  
 ナカデ 中 出  
 ニシラ 西 原  
 カニガイト 蟹ヶ糸  
 ニシダ 西 出  
 ホソダ 細 田  
 ヤケヤ 藪 田  
 ヤナセ 藪 田  
 カモモ 加 茂  
 月之木 野 神  
 ノガミ 南 川  
 ミナミガワラ 南 川  
 シングウ 新 宮  
 クボ 久 保  
 シガク 新 楽

シガタマエ 新 楽 前  
 カタロク 角 六  
 シモホソダ 下 細 田  
 ホソダ 細 田  
 ヤブタ 藪 田  
 カネコマエ (カネコマエ) 金子 前  
 中川原 東 出  
 ヒガシデ 東 出  
 シンジョウ 新 庄  
 ニシデ 西 出  
 シモガワラ 下 川 原  
 アラバリ 荒 張  
 ヨコタ 横 田  
 [善助山・西ノ沢]  
 [岩見の奥]  
 [ツキダシ・荒は]  
 [下栗栖・塚木]  
 [西生寺]  
 [深田・葉師・ちかん]  
 [丸岡・割山]  
 [割山]  
 [瀬戸山]  
 [蛇ノ尾・半介地]  
 [屋敷田]  
 [山田・照蓮寺]  
 [ひろぶち・堀]  
 [樋越]  
 [東出・中小路・北川原]

イッボンギ 一本木  
 ヒノクチ 樋口  
 マルソエ 九添  
 ジンデン 神田  
 ホリキリ 堀切  
 アヤダ 綾田  
 トヲオ 虎尾  
 カワラダ 川原田  
 ウチダ 打田  
 サンビヤクボウ 三三坊  
 サクラモト 桜本  
 ゴタンヂ 五反地  
 カヨダ 通田  
 オオクボ 大久保  
 ツカマチ 塚町

〔堀切・山田〕

〔通田・見渡部〕

〔三大地〕

イシバン 石橋  
 〔大石橋・上安城寺・下安城寺〕

カミシンジ 上  
 ヨウ 新庄  
 カタロク 角六  
 ヒガシデ 東出  
 ノガミ 野神  
 ナカイ 中井  
 シンジョウ 新庄  
 ミナミダイ 南代  
 イッチョウウジ 一町地  
 イシバイジ 石灰地  
 ナナタンジ 七反地  
 キタデ 北出  
 カットリ 勘取  
 〔野神〕

カミキタウラ 上北浦  
 ツチダチヨウ 土田町  
 ヒロハダケ 広畑ヶ  
 ノベ 野辺  
 カミガコイ 上圃井  
 シモノベ 下野辺  
 シモキタウラ 下北浦  
 タケノコシ 竹ノ腰  
 ナカガコイ 中圃井  
 シモガコイ 下圃井  
 カミドロデン 上泥田  
 カミナムラ 上苗村  
 カミタカタボ 上高久保  
 シモタカタボ 下高久保  
 シモナムラ 下苗村  
 ナンド 納戸  
 〔沢田〕

シモドロデン 下泥田  
 カミガワラ 上川原  
 カミシボラ 上芝原  
 シモガワラ 下川原  
 シモンボラ 下芝原  
 ヒヤクマス 百軒  
 トンダイジ 東代寺  
 ウワミナミ 上南代  
 ナカミナミ 中南代  
 ナカミナミ 中南代  
 タケノコシ 竹ノ越  
 ヒミヅカ 日見塚  
 カミクワノモト 上桑ノ本  
 オカジリ 岡尻  
 イチノナガレ 一ノ流  
 キタミズクミ 北水汲  
 〔水汲〕

シモクワノモト 下桑ノ本  
 フジノキ 藤ノ木  
 ニシデ 西出  
 ミナミデ 南出  
 ミナミミズ 南水汲  
 シンドウ 新堂  
 ツキノタテ 月ノ立  
 ウワノベ 上ノ辺  
 カミゴゼワラ 上五水原  
 ニノナガレ 二ノ流  
 シモゴゼワラ 下五水原  
 シタベ 下ノ辺  
 (シモノベ) 〔横田〕  
 ニシウラ 西浦  
 キタウラ 北浦  
 カコイ 西井

バシヨメ 芭蕉目  
 モリモト 森本  
 イシダ 石田  
 ダイロ 大路  
 クヂ 久地  
 カミサクラ 上桜本  
 モト 上  
 イチバンチ 一番町  
 ヒガカリ 樋掛  
 ブタイ 舞台  
 ヒグチ 樋口  
 キタシタノ 北下ノ切  
 キリ 北下ノ切  
 ミナミシタ 南下ノ切  
 ノキリ 南下ノ切  
 ゴタンヂ 五反地  
 シモサクラ 下桜本  
 モト 下  
 ムナダカ 棟高  
 シリタサレ 尻腐



カミジョウギ 上定木  
カミオオマチ 上大町  
シモオオマチ 下大町  
シモジョウギ 下定木

敏満寺

オオタニ 大谷  
セイリユウ 青龍山  
ザン 蛭子谷  
エビスコダニ 石万谷  
コクマンダニ 横峰  
ヨコミネ 谷田  
タニダ 丸山  
マルヤマ 風呂谷  
フロガタニ 北谷  
キタダニ 南谷  
ミナミダニ 西福寺  
サイフクジ

ヤクシダニ 薬師谷  
セトヤマ 背戸山  
テラヤシキ 寺屋敷  
ニシタニ 西谷  
イケノウチ 池之内  
ヒラカイドウ 平海道  
新谷前  
シंगाイ 新谷  
アワタ 粟田  
カリヤ 飯屋  
シモズツ 下筒(小山)  
チャウリ 茶売  
ミズフネ 水舟  
ミナオチ 水無落  
タテショウジ 立小路  
ナカミチ 中道  
ノガミ 野神

〔長田・神ノ木〕

ウエノガミ 上野神  
ジノウドウ 地藏堂  
ダイモン 大門  
ハラダ 原田  
〔杉立・野畑・入の内・豆腐屋町・天神前・柳町・丸入の神・丸入〕

ヨキトギ 斧磨  
シブタニ 渋谷  
ロウジョウ 籠城  
ウチカド 打角  
キタウラ 北裏  
ミナミウラ 南裏  
ナカマチ 仲町  
トリガシタ 鳥ヶ下  
〔横土手・北裏・上込・江戸小路〕  
〔音問尾・八幡通・北町通・江戸小路〕

17 小字名について

アマノイ 天  
〔アマノイ〕 〔天井・念仏講・大力鳥〕  
エンノコシ 円之越  
ヒラノ 平野  
ドウダチ 堂立  
〔徳長・箱地・七水口・長はさま・角之糸〕  
セバウチ 青場内・長塚・関之上  
カスジソウ 粕地蔵  
〔枯木・阿森・飯盛木〕  
イヌガケ 犬掛  
ミミクサ 耳草  
エイリ 江入  
〔江入・八田・梯田〕  
ゴタンヂ 五反地  
ハツチヨウ 八丁堂

オオツカ 大塚  
〔大塚・力入堂〕  
シリバヤシ 尻林  
〔尻林・夏目〕  
タカバタケ 高畑  
アオヤギ 青柳  
〔青柳・大日場〕  
ハチマンド 八幡通  
オリ 御殿  
オウマヤ 御殿  
オオツカ 大塚  
シリバヤシ 尻林  
タカバタケ 高畑  
アオヤギ 青柳  
ハチマンド 八幡通  
オリ 御殿  
オウマヤ 御殿

獺木

ミヤジ 宮地  
〔ヤマシ〕  
ニタンヂ 二反地  
ツネノ 常野  
ヒガカリ 樋掛  
ミゾバタ 溝畑  
〔ナジュラ・ジュンレ〕

ハッタオサ 八反長  
モリ 森  
カキノマチ 柿之町  
ロクタオサ 六反長  
イモバタ 芋畑  
カワラバタ 川原端  
ヒガシガワラ 東川原  
キノシタ 木之下  
〔東方〕  
シタオサ 四反長  
スギノモト 杉之本  
イマチ 居町  
キタショウジ 北小路  
カジコウジ 鍛冶小路  
ゴシヤドメ 御車留  
ヒガンボ 東方  
ミナミシヨ 南小路  
ウジ 城  
シロ

ニシバタ 西畑  
 キユウデン (ダイジ) 久田  
 ケンジョウ 見上  
 ヨシイダイ 吉居台  
 ナカノキリ 中之切  
 ナガレ 流  
 ソトナガレ (ソトヒラキ) 外流 (外開)  
 ソトハカダテ 外墓立  
 ハカダテ 墓立  
 ホノマチ 保之町  
 川相  
 コンドウガ 金堂川原  
 ワラ 小谷  
 コタニ 小谷  
 オ (オカバタ) 岡 (岡畑)

チュウエイ (チュウエイ) 中永 (中永海道)  
 カイドウ (カイドウ) 的場  
 マトバ 的場  
 マエハラ 前原  
 オチアイ 落合  
 コハラグチ 小原口  
 コバタケ 小畑  
 キタガワ 北川  
 ニシガタニ 西ヶ谷  
 イワシタ 岩下  
 ノボリ 登り  
 オオサワ (オオサ) 大沢 (大沢谷)  
 ワダニ (ワダニ) 吹毛ノ畔  
 フケノクロ 田ノ尻

アミダイ 網台  
 一組 中永一部小谷  
 二組 中永一部小谷  
 三組 的場  
 四組 的場 (カエンデ)  
 五組 前原  
 六組 前原一部落合  
 七組 落合一部北川  
 八組 岩下 大沢一部登り  
 九組 落合一部小原田  
 十組 前原 落合 一部中永  
 藤瀬  
 ヤツオ 八尾  
 アミダイ 網台  
 フケノクロ 吹ノ畦

コウガツジ 甲賀辻  
 トリノツジ 鳥ノ辻  
 キダハン 木田橋  
 タガタニ 田ヶ谷  
 イリガタニ 入ヶ谷  
 マワリト 廻り戸  
 ウエノ 上野  
 イリノシタ 溜ノ下  
 シヤクブツ 尺仏  
 ヒロサワ 広沢  
 テラカイドウ 寺海道  
 タキガハラ 滝ヶ原  
 タキノムカイ 滝ノ向  
 タキクルマド 滝車戸  
 富之尾  
 モミノキ 楳木

イノウエ 井野上  
 オオガツトリ 大勝取  
 ノズラ 野顔  
 コヤデラ 小屋寺  
 タメダニ 溜谷  
 ナシノキ 梨ノ木  
 コモリイケ 小森池  
 イケノタニ 池ノ谷  
 ナガオ 長尾  
 イワハナ 岩鼻  
 オオタニ 大谷  
 ニシノワキ 西ノ脇  
 レツケツ 札掛津  
 ツクダ 佃  
 コヅツミ 小堤  
 パンバ 馬場  
 クロガイト 黒海戸

シリエ 尻江  
 ニシノ 西野  
 キタノシロ 北ノ城  
 ナワテ 縄手  
 トノシロ 殿後  
 ドウノシタ 堂ノ下  
 ノセ 野瀬  
 カドマエ 門前  
 トノヤマ 殿山  
 ノガミ 野上  
 マエノ 前野  
 ドウノマエ 堂ノ前  
 カミイセクボ 上伊勢窪  
 カイドウスジ 海道筋  
 ミナミヤマ 南山  
 ジュクダニ 熟谷  
 ガニダニ 蟹谷

イワシダニ 鱈 谷  
 コタニ 小 谷  
 ショウブタニ 勝負 谷  
 ジョウガハタ 城 畑  
 ウシロヤマ 後 山  
 ダイモン 大 門  
 大 門  
 堀ノカド 堀 之 角  
 [林山・藪ノ内・  
 エンナミ]  
 ウエナカニシ 上 中 西  
 [下 中 西]  
 ハタガシラ 旗 頭  
 トチタニ 柄 谷  
 オオニシ 大 西  
 ミネノヤマ 峰 山  
 [風呂屋]  
 ミナミダニ 南 谷  
 [風呂ヶ谷]

楢崎

ナガオ 長 尾  
 [シギリ]  
 タカオ 高 尾  
 [丸山]  
 ヤッケンザカ 菜 研 坂  
 [アン谷]  
 イシバン 石 橋  
 ナガチヨウ 長 丁  
 [飯盛塚・ヒジリ  
 カセ・カンジヨウ  
 デン・ミタチノ]  
 一ノ瀬 小 杉  
 [堂ノ庭・菜種口  
 ・小杉]  
 コスギ 小 杉  
 キタカイドウ 北 海道  
 [狐塚]  
 キタデ 北 出  
 [登り口・北出・  
 狐塚]  
 ノガミ 野 神  
 モリノウシロ 森 後  
 [森ノ山]  
 仏ヶ後 追 峠  
 オイトゲ 追 峠  
 フカタニ 深 谷  
 フグリガケ 布 栗 掛  
 ヤツオ 八 尾  
 コフカタニ 小 深 谷  
 ハタガタニ 畑 ヶ 谷  
 イダケ 井 嶺  
 シド 志 戸  
 ムラヒガシ 村 東

樋田

アゼハラ 畦 原  
 ミヤニシ 宮 西  
 イド 井 戸  
 ムラニシ 村 西  
 サカシリ 坂 尻  
 ニシミネ 西 峰  
 ニシノワキ 西 脇  
 スモモダニ スモモ 谷  
 ヤブガタニ 藪 ヶ 谷  
 ナベドコダニ 鍋 床 谷  
 ヨダレダニ ヨダレ 谷  
 フナバラ 船 原  
 ヒダガタニ 樋田ヶ谷口  
 グチ 樋田ヶ谷口  
 ヤマノカミ 山 神  
 フルド 古 戸  
 ニシウラ 西 後  
 シモカイドウ 下 海道  
 ハゲヤンキ 下 海道  
 シンド 新 戸  
 カキノキダチ 柿 木 立  
 ウマワタン 午 渡 ン  
 ハナキリ 花 切  
 シヨボダニ シヨボ 谷  
 メトリ メトリ  
 タカヤ 高 谷  
 ドウガクボ 下 海道  
 ワルダニ 割 谷  
 モモダニ モモ 谷  
 オモダニ オモ 谷  
 ホソダニ ホソ 谷  
 ツボイケ 坪 池  
 タキダニ 瀧 谷  
 カンノシヤマ 観音山  
 ホウラガンマ ほうらガンマ  
 ミネガヒラ 峰ヶ平  
 萱原 野 瀬  
 ノセ 野 瀬  
 シモヤマ 下 山  
 ナガレダニ 流 谷  
 オタビルワラ 奥 畑 原  
 クチビルワラ 口 畑 原  
 カワサキ 川 崎  
 クロマナコ 黒 眼  
 イチノワタセ 一ノ渡瀬  
 オクキビタニ 奥 黍 谷  
 イモバタ 芋 畑  
 アカイシ 赤 石  
 クチキビタニ 口 黍 谷

ムカイノ	向野	イ	ド	井戸	オオハギジリ	大萩尻
カンノボウ	観音坊	ナカカイドウ	中海道	オヤダニ	親	親
トチダニ	栃谷	ニンノワキ	西ノ脇	ナタネ	菜種	菜種
ナシワラ	梨子原	ゴトウダニ	後藤谷	ミネアイオ	峰尾	峰尾
オオコバ	大木場	コバガタニ	小場ヶ谷	メオトイワ	夫婦岩	夫婦岩
ナシワラグチ	梨子原口	タキガサコ	瀧	イチエンボウ	一円坊	一円坊
ウエノガワラ	上野川原	チエダニ	知恵谷	ヒライワ	平岩	平岩
ボウシトリ	帽子取	イモリダニ	守宮谷	インヤスバ	石休場	石休場
ノガワラ	野川原	ミネヒラ	蜂ヶ平	ヒロバタ	広畑	広畑
オンマヤ	御馬屋	ヨコガケ	横掛ヶ	ノセ	野瀬	野瀬
コザワ	小沢	ナカバタ	中畑	カクレガタニ	隠ヶ谷	隠ヶ谷
ムカイヒロ	向広	ヒガシデ	東出	ヒガシデ	東出	東出
イタガタニ	板ヶ谷	ドウガタニ	堂谷	ドウガタニ	堂谷	堂谷
ヒガカリ	樋掛り	グチ	西出	グチ	西出	西出
サンマイダニ	三昧谷	ニシデ	川出	ニシデ	川出	川出
オクバタ	奥畑	カワラデ	川原出	カワラデ	川原出	川原出
ヒガシカイ	東海道	ナカジマ	中嶋	ナカジマ	中嶋	中嶋
ドウ		イドガタニ	井戸ヶ谷	イドガタニ	井戸ヶ谷	井戸ヶ谷

ニシガタニ	西ヶ谷	シジユウハ	四十八滝	ケンハタ	ヶシ畑
ワタリセ	渡瀬	チタキ	淵ヶ平	イドノカミ	井戸上
ムクノキ	椋ノ木	フチガダイラ	淵ヶ平	カマガタニ	釜ヶ谷
デグチ	出	オオバシラ	王柱	シユウズ	清水
イシガキド	石ヶ木戸	カラタニ	亮谷	ハナノキ	花ノ木
ヤナギザコ	柳榮	イワオダニ	岩尾谷	ソトダニ	外谷
イチノワタセ	一之渡瀬	ヤシキガタニ	屋敷谷	ソトダニ	外谷
ドウガタニ	堂谷	コタニ	小谷	ソトダニ	外谷
ショウズガ	生水山	カヤタニ	萱谷	イチノタニ	一ノ谷
ヤマ	生井	ビョウジ	屏地	イケヅクリ	池造
スルイ	スル井	コウケ	小受	コウケ	小受
フゴダニ	畚谷	ハヤシダイ	林代	ハヤシダイ	林代
タカハタ	高畑	キタザカ	北坂	キタザカ	北坂
ホリハタ	堀畑	ワタリセ	渡瀬	ワタリセ	渡瀬
ゴクラクジ	極楽寺	ノボリ	登り	ノボリ	登り
ゲンベイガ	源平ヶ谷	ヒロ	廣	ヒロ	廣
ゲンバタ	源畑	サカオク	坂奥	サカオク	坂奥
タニ		タスキワラ	狸原	タスキワラ	狸原



ジヨロバタ 女良畑  
ワダ 和田  
霜ヶ原  
カワデ 川手  
イシバイ 石灰  
ハタケダ 畑田  
イシロウダニ 一良谷  
シケダニ 〔シケダニ〕  
インパンダニ 石橋谷  
コトウゲ 小峠  
ミズノミ 水呑  
タケカイドウ 竹海道  
ヤナギダニ 柳谷  
ヘイナイダニ 平内谷  
エンドウヤ 遠藤屋敷  
シキ 峠  
トウゲクボ 峠久保  
ノガミ 野神  
カワムカイ 川向  
ナガオ 長尾

霜ヶ原

川手

石灰

畑田

〔大角・塚根・北ノ川・砂原・坂ノ尻・田畑・池ノ本・久保ノ縄手・清水〕

〔マコバ・ホトケガタニ〕

〔コンボガダニ〕

〔キオトシヤマ・ダンコダニ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

〔オクノウエ〕

ミヤシタ 宮下  
ナカニシ 中西  
タカハタ 高畑  
オオニシ 大西  
ホソワラ 細原  
ノガミ 野神  
ムカイバタ 向畑  
オオミハナシ 大見放  
ナガザコ 長ザコ  
イチノタニ 一ノ谷

ニノタニ 二ノ谷  
サンノタニ 三ノ谷  
テラタニ 寺谷  
ヨコホタ 横ホタ  
カマガタニ 釜ヶ谷  
オクガタニ 奥ヶ谷  
ドウノモト 堂ノ本  
ニンガタニ 西ヶ谷  
ニシツジ 西辻  
イドノモト 井戸ノ本

イモジダニ 伊モジ谷  
ホリマエ 堀前  
タキノウエ 滝ノ上  
大君ヶ畑 奥山  
オクヤマ 〔百々女鬼〕  
クチナンダニ クチナン谷  
クチナンダニ 〔入口から赤ドチ〕  
ヤナギダニ 柳谷  
マエダニ 前谷  
ミヨウガタニ 妙ヶ谷  
クロタニ 黒谷  
ガニダニ ガニ谷

イシタラ 石倉  
ウエノ 上野  
ナカウエノ 中上野  
オオウエノ 大上野

遠藤屋敷  
峠久保  
野神  
川向  
長尾

イモジダニ 伊モジ谷  
オキサダニ 〔オキサダ〕  
ホリマエ 堀前  
タキノウエ 滝ノ上  
大君ヶ畑 奥山  
オクヤマ 〔百々女鬼〕  
クチナンダニ クチナン谷  
クチナンダニ 〔入口から赤ドチ〕  
ヤナギダニ 柳谷  
マエダニ 前谷  
ミヨウガタニ 妙ヶ谷  
クロタニ 黒谷  
ガニダニ ガニ谷

四	三	二	一	タ	ミ	ウ	サ	ミ	ヒ	テ	ノ	ム	オ	タ
組	組	組	組	カ	ズ	エ	ワ	ヤ	ガ	ラ	セ	カ	チ	カ
野	寺	奥	沢	カ	カ	ダ	ム	カ	シ	タ	ム	カ	イ	カ
瀬	谷	万	村	ロ	ミ	ニ	ラ	イ	ガ	タ	セ	イ	ワ	ヤ
村		谷		ク	ダ	ダ	村	ド	シ	ニ	ム	ガ	イ	ヤ
				ワ	ニ	ニ			ガ					
				グ	ダ	ダ			シ					
				チ	ニ	ニ			ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					
									ガ					
									シ					

カミナリイワ カミナリ岩  
 サカノムカイ 坂ノ向  
 コゴガケ 横ガケ  
 ツツロトウゲ ツツロ峠  
 カゲタニ カゲ谷  
 ツツロ ツツロ  
 アリカンダニ アリカン谷  
 カクレゴヤ カクレ小屋  
 マルヤマ 丸山  
 コタキダニ 小タキ谷  
 オオタキダニ 大滝谷  
 ヨダチ ヨダチ  
 アカハゲ アカハゲ  
 クラガダニ 倉谷  
 ハゲノタニ ハゲノ谷  
 ナカクラ 中倉  
 タノタニ タノ谷

ジニウヤク 十益谷  
 ダニ ハリノキ ハリノ木  
 カンネンバタ カンネンバタ  
 ハタケ ハタケ  
 フタマタ 二又  
 イワノタニ 岩ノ谷  
 イスノネヤ 戌ノ子ヤ  
 ゴスケダニ 五助谷  
 カケノサカ カケノ坂  
 シラタニ 白谷  
 ヒヨノ ヒヨ野  
 ウオダニ 宇ツ谷  
 ヨシガタニ ヨシケ谷

サンゴウミズ 三合水  
 ヒロハタ 広畑  
 タナノシタ 棚ノ下  
 オドリヤマ 小栗山  
 (コグリ) 〔小谷・ヒンヂヤ  
 ヤマ) 畑・蛇谷〕  
 シモデ 下出  
 ヒガシダニ 東谷  
 チヤノマエ 茶ノ前ノ尾  
 ノオ 堂ノ谷  
 ドウノタニ (ドウノク)  
 ニシデ 西出  
 シモミズツキ 下水付  
 チヤノマエ 茶ノ前頭  
 ガシラ 上出  
 カミデ (ウエデ)  
 アマクボ 雨久保  
 ミズツキガ 水付頭  
 シラ

マエザカ 前  
 トオゲノクボ 峠ノ久保  
 キヤルマタ キヤルマタ  
 ミチノシタ 道ノ下  
 ノボリタテ 登り立  
 スベリイワ スベリ岩  
 カマガタニ カマガ谷  
 タボ 久保  
 イワミズ 岩水  
 シモナカノ (シタナ) 下中野  
 カノ (カノ) 下中野  
 ヤマ ヒヨタン山  
 コワリ 小割  
 ダケジリ ダケジリ  
 アチラ アチラ

ヒツクリ (ヒツクリ) 日作  
 ムロガタニ 室ヶ谷  
 ソワ ソワ  
 エノキダテ 榎木立  
 チャエンバラ 茶園原  
 ミヤノマエ 宮ノ前  
 ナカセ 中瀬  
 コムカイ 小向  
 ハチジリ 鉢尻  
 ニシデ 西出  
 カミデ 上出  
 ヨシガタニ 五借  
 フタマタ ヨシガ谷  
 オオタニ 大谷

ゼニガタニ (ゼンケ) ゼニヶ谷  
 スギノタニ (スギガ) 杉ノ谷 (杉ヶ谷)  
 ウシカイ ウシカイ  
 ロガタニ ロヶ谷  
 タキダニ タキ谷  
 フナヒキダニ 舟ヒキ谷  
 (フネヒキ) 〔フネヒキ〕  
 ニシヨコネ 西ヨコ子  
 カミロガタニ (カミロ) 上ロノ谷  
 (ノタニ) 上ロノ谷  
 ヤケオ ヤケ尾  
 マメドチ マメドチ  
 ハチノオ (ハチノオ) 八チ尾 (ハチノ尾)  
 トンボダニ (トシボ) トンボ谷 (トシボ谷)  
 (ダニ)

ニノハナ	ニノハナ	ヨコガケ	横掛
ヒモノコヤダニ	ヒモノコヤダニ	オチイワ	落岩
ノセ	ノセ	コロシダニ	〔コロシダニ〕
カガンド	カガンド	コロシダニ	〔コロシダニ〕
タニサカ	谷坂	ハタガタニ	畑ヶ谷
ニヨリ	ニヨリ	ツボヤ	坪屋
ヨコヤマ	ヨコヤマ	タバナシダニ	首無谷
ヤスミバ	ヤスミバ	シヨウブダニ	勝負谷
ハカノマニ	ハカノマニ	サンゴウミズ	三合水
カワノムカイ	川ノ向	ササダニ	笹谷
オオギバタ	扇畑	ネコタ	猫田
ヘイサクダニ	平作谷	コヤデラ	小屋寺
ヒガシヤマ	東山	コヤマ	小山
トウゲ	峠		
ムラノナカ	村中		
ツクリバタ	作畑		
(サクバタ)			

## 18 身近にいた特攻隊員

多賀町の中で、祖国に殉じ戦没された五三七人については、下巻に記載している。

戦争の悲惨な体験は、戦場においても国内においても、外地にいた人も、国民のすべての人々に、限らない困難と苦痛をもたらしたのであった。

その中でも、世界戦史に残されていない特異な殉国者と言われ、日本陸海軍のみが実行した特別攻撃隊があった。

特異な戦闘方法である特別攻撃は、爆弾を抱えて飛行機もろとも敵艦船に突入して爆破する攻撃と、潜水艦から離脱して海中を航行し敵艦に体当たりする人間魚雷と、海岸から兵員一人が操縦した魚雷を航行し、敵艦を求めて体当たりする『回天』による攻撃である。

決死隊と言われた戦闘方法はいく多の戦例にあり、それでも九死一生の機会は残されていたが、太平洋戦争末期に行われた特別攻撃は十死零生と言われ、隊員は爆薬とともに爆死する悲壮な攻撃である。

多賀町からも特別攻撃に参加した人が二人ある。

**陸軍特別 攻撃隊** 土田の清水義雄は、この攻撃隊に参加し、昭和二〇年四月一六日、沖縄海域で敵艦に突入して散華した(下巻二一七ページ、二二〇ページ参照)。

この特別攻撃の行われた経過は次のようである。

昭和一九年(一九四四)五月下旬、ビアク島(ニューギニア)が攻撃を受けたとき、同島守備の陸軍航空隊高田勝重は、二式複戦闘機四機を率いて独断攻撃して、敵輸送船団に体当たりして大きな損害を与えた。

この戦法が航空特攻戦法の先駆けとなり、九月二五日航空特攻の実施が決定され、当初は爆撃機を中心として、特攻機への改造が急ぎ実施された。



航空機の機首に突出した導爆装置をつけ、これが衝突すると、抱きかかえている爆弾が爆発するもので、人間飛行爆弾と言われて、一度出撃すると決して帰還できないものである。

この戦法を決定するとき、一部では九死一生の戦法ではなく、十死零生の特攻は、人道上からみて行うべきではない、との意見もあったが、優勢な敵を迎えての戦いでは、撃墜されることが決定的だと判断されても出撃しなければならぬ状況に追いやられた。無駄死によりも、特攻死によって殉国英雄となるのが軍人の死生観であるという、青年将校の意気がこの戦法を採用する心の寄りどころであった。

特攻隊員は決して命令ではなく、本人の自由意志によって選ぶものであると指示され、志願者は名前に二重丸をつけて、意志の強いことを示してほしい、と念を押して申出書を提出させ決定したという。

昭和一九年九月二五日、特攻隊の編成と攻撃実施が

し、陸海航空部隊の残存航空機の総力を沖縄周辺の米軍艦艇に向け出撃し、さらに特攻機二二八機も飛び立った。

清水義雄は第七九振武隊一二機のうち、四機を指揮する二番隊の隊長として、知覧の夜明け六時十分、沖繩に向けて還らざる出撃をしいった。

空中戦のできない九八式直協機を改装し、二五〇<sup>キ</sup>爆弾を抱え、沖繩まで六五〇<sup>キ</sup>、約二時間半の行程を、行きの片道燃料のみで十死零生の出撃であった。

出撃前知覧で待機中の四月七日の日記に清水義雄は、次の記事を残している。

飛行機ノ操縦席ニハ美シイ花ヲ奇麗ナ紙デツツミ、ククリツケテアリ、前ニハ人形ガカケラレテアル。女子挺身隊員ノ心ヤリ、ト聞ク。

特攻機の出発を見送り続けた、知覧奉仕隊の女生徒は、こう記している。

特攻機の飛び立った空、その空を仰いで、私は飛行場の

陸軍航空本部で決定され、三日後の九月二八日、関係航空部隊に特攻隊の差出しに関する指示が伝達された。

昭和一九年六月一九日、マリアナ沖海戦で日本の航空母艦を中心とした機動部隊は壊滅的損害を受け、七月七日サイパン島玉砕によって、同島を基地としたB29爆撃機により日本の本土は空襲を受け、急激に戦力が低下し、敗戦必至の状況となった。

特別攻撃も日本の戦力を挽回する見通しのないまま、尊い犠牲を払いつつ度を増して行われていった。

このような情勢下清水義雄は、昭和一九年六月、熊谷陸軍飛行学校で少年航空兵の教育に当たっていたが、一〇月二〇日特攻隊に志願して特別訓練を受け、昭和二〇年三月二七日、甲府市で編成された第七九振武隊に編入された。四月五日郷土の土田上空を通過し、生家の屋上から振られる日の丸の旗に送られ、出撃基地の鹿児島県知覧に向かった。

四月一六日、この日陸軍は第三次航空総攻撃を発動

草むらに顔を伏せて泣きました。泣いても、泣いても涙はとまらなかつたのです。

今ここに話をしている若人、この美しい賢い人達が幾時間かの後には死んで行く、それは何たる残酷なむちでしょう。私の心はそれに打ちひしがれました。

**海軍特攻隊** 海軍の特攻戦法は、航空機により陸軍特攻隊と同じ攻撃法によるものと、海

上・海中からするものとに分かれていた。

海軍士官黒木博と仁科関夫は、兵器庫に残存している九三式魚雷を改装して特攻兵器とする案を提言し、昭和一九年七月試作兵器が完成した。

「回天」は、爆薬一・五トを先端に備え、最高速度三〇ノ、五五六ノを航走できる九三式魚雷の内部に、一人乗りの操縦席を組み入れて、目標に向かって潜航、激突して爆発する必死必殺の特攻艇である。

四二〇隻が生産されて、昭和一九年一月には母艦潜水艦に搭載された。菊水隊がバラオ島付近に、一二



5%の誤差をみて			10%の誤差をみて		
a 碗使用	2.5杯	計測時間 3分	a 碗使用	3杯	計測時間 3分
b 〃	2杯	2分	b 〃	3.5杯	3分
c 〃	4杯	3分	c 〃	4.5杯	3分

町史上巻 p.902 配水時間の計算を合わせ考えると、反当たり10分未満程度の時間計測は可能であったと思われる。

しかし溝配水時間10時間等の長時間計測をいかにしたかの問題は残るのである。

月金剛隊がグアム島に、昭和二〇年二月千早隊、神武隊が硫黄島に出撃し、八六人の隊員が、相当な戦果を挙げて南方海上に散華していった。

連合軍の本土上陸が予想される状況になって、上陸予想海岸に配備し、陸地に接近する敵艦艇に体当たりする特攻隊を準備した。

この特攻隊員志望者が、われわれの身近から出た。月之木の近藤伊助がその一人で、彼は昭和一八年海軍甲種予科練習生（予科練）として、奈良分遣隊に入隊した。同一九年八月、回天搭乗員の応募に率先して参加した。

それ以来、人間魚雷と言われた新兵器に乗り組み、潜航操縦を重ね敵艦に体当たりする訓練を受け、ひたすら出撃の日を待っていたのである。

九月に広島県倉橋島の基地に移り訓練を受け、昭和二〇年三月一日、回天による特攻術特技章を受けた。

敵の本土接近、上陸が間近にあると予想されるの

で、特攻「勤皇隊」の編成に入り、回天六艇、特攻隊員六人は、高知県須崎の第二三突撃隊の中に組み入れられて、本土決戦に備えた。

八月二日「敵艦隊土佐湾に接近せり、出撃準備」との命を受け、回天に搭乗して出発直前に、混乱による誤報であったと、中止される一場面もあった。

「祖国のため我れ死す」の覚悟で、待機中の隊員は、突入して散華した特攻隊員と同じ心境にあった。

資料は無いが屏風の藤本正太郎は、特攻兵器「震洋」、久徳の夏原昭は回天搭乗員の訓練を受けて待機中であつたと言われている。

特攻隊員と言えば、その崇高な精神を敬仰してはるか雲の上の存在と意識していたが、思えば身近な郷土多賀町にも隊員のいたことをいまさらのように思い直し心から敬意を表するのである。

## 19 中世の水利に使った合子

したがって、流量係数  $c'$  は次式から求められる。

$$c' = 18.460915 \frac{\sqrt{h}}{t} \quad (21)$$

3回目の測定値を用いて、得られた  $c'$  を表8に示す。

$c'$  が普通の係数值 (0.60~0.64) より大きい値となっているのは、実際の流出が  $h$  の0.5乗より大きいからである。なお、参考までに彦根市東沼波町の合子では0.979となっている(「民俗文化」251号参照)。

$c'$  の平均値を用いれば、以下の理論式を用いて任意の水深  $h$  から経過時間  $t$  による流出量  $q$  を求めることができる。

$$q = c'a\sqrt{2gh} - \frac{c'^2 a^2 g}{A} t \quad (22)$$

また、次式によれば簡単にその水深  $h$  での流出量が求められる。

$$q = c'a\sqrt{2gh} \quad (23)$$

## 3. 椀の杯数と全量排出時間

椀の容積、合子容器の断面積および以下の式(3回目の測定結果)を用いて、椀の杯数による水の全量排出時間を求めた。

$h \geq 27\text{mm}$  の場合

$$t = 5.3741 h^{0.78270} \quad (13)$$

$h \leq 26\text{mm}$  の場合

$$t = 2.5 h \quad (15)$$

得られた結果を表9に示す。なお、表中の境界線(二重線)および斜線部分は、合子容器の高さ12.80cmを越える場合の架空数値を示す。

表9 椀の杯数と全量排出時間

椀 単位		杯数				
		0.5	1.0	1.5	2.0	2.5
a	c. c	463.0	926.0	1,389	1,852	2,315
	mm	16.95	33.90	50.86	67.81	84.76
	sec	42.38	84.72	116.38	145.77	173.58
b	c. c	394.2	788.3	1,182	1,577	1,971
	mm	14.43	28.86	43.28	57.74	72.17
	sec	36.08	74.69	102.57	128.53	153.05
c	c. c	312.2	624.3	936.5	1,249	1,561
	mm	11.43	22.85	34.27	45.73	57.15
	sec	28.58	57.13	85.44	107.09	127.50
椀 単位		杯数				
		3.0	3.5	4.0	4.5	5.0
a	c. c	2,778	3,241	3,704	4,167	4,630
	mm	101.71	118.67	135.62	152.57	169.52
	sec	200.20	225.89	250.77	274.98	298.62
b	c. c	2,365	2,759	3,153	3,547	3,942
	mm	86.59	101.02	115.44	129.87	144.33
	sec	176.51	199.14	221.06	242.41	263.29
c	c. c	1,873	2,185	2,497	2,809	3,122
	mm	68.58	80.00	91.43	102.28	114.31
	sec	147.06	165.90	184.18	201.08	219.37

上段：水の容積，中段：水深，下段：全量排出時間

## 4. 計測の実際

田圃での配水時間の測定は表9のような厳密な計測法も不可能であるし、またそこまでの厳正さの要求もなされなかったものと推測される。したがって実際の使用方法においてはどの程度の許容を認めて測定されたものであるかは大きな問題である。

そこで大胆に独断ではあるが次のような推察をしてみてもどうかと考える。

(8)式から,  $c = 4.2659$ (10)式から,  $c = 7.3844$ (12)式から,  $c = 3.4352$ (14)式から,  $c = 7.3844$ 

以上の流量係数は次のように用いられる。

(10)式および(14)式から

$$t = \frac{2A}{ca\sqrt{2g}} h^{b_0}$$

上式の  $c$  および  $b_0$  に実験値を用いればよい。

(4) 実験式の計算例

$$t = \frac{2A}{ca\sqrt{2g}} (h)^{b_0}$$

ただし,  $A = 27,312\text{mm}^2$  $a = 21.135\text{mm}^2$  $g = 9,800\text{mm/sec}^2$ 

1回目の測定から

$$t = \frac{2 \times 27,312}{3.610 \times 21.135 \sqrt{19,600}} (100)^{0.79293} = 197.0^{\text{sec}} (190)$$

$$t = \quad \quad \quad (55)^{0.79293} = 122.6 \quad (125)$$

2回目の測定から

$$t = \frac{2 \times 27,312}{4.266 \times 21.135 \sqrt{19,600}} (100)^{0.81143} = 201.9^{\text{sec}} (195)$$

$$t = \quad \quad \quad (56)^{0.81143} = 124.4 \quad (125)$$

3回目の測定から

$$t = \frac{2 \times 27,312}{3.435 \times 21.135 \sqrt{19,600}} (100)^{0.79270} = 197.6^{\text{sec}} (195)$$

$$t = \quad \quad \quad (64)^{0.79270} = 139.3 \quad (140)$$

ただし, ( ) 内の数字は実験値である。

(5) 理論式の流量係数  $c'$  の決定

(1)式から

$$t = \frac{2A}{c'a\sqrt{2g}} \sqrt{h} \quad (20)$$

ここに,  $A = 27,312\text{mm}^2$  $a = 21.135\text{mm}^2$  $g = 9,800\text{mm/sec}^2$ 表8 理論式の  $c'$  値

No.	$c'$ 値	No.	$c'$ 値
1	0.946714	27	1.44819
2	0.956942	28	1.50733
3	0.962328	29	1.57435
4	0.972976	30	1.65119
5	0.978282	31	1.74051
6	0.983357	32	1.84609
7	0.994450	33	1.97355
8	1.005870	34	2.13168
9	1.001761	35	2.33514
10	1.02970	36	2.61077
11	1.04213	37	3.01465
12	1.05491	38	3.69218
13	1.06803	39	(5.22153)
14	1.08149		
15	1.09528		
16	1.11998		
17	1.12371		
18	1.15056		
19	1.16625		
20	1.18208		
21	1.21356		
22	1.24770		
23	1.26641		
25	1.32553		
26	1.37037		
平均	1.09361	平均	2.12714

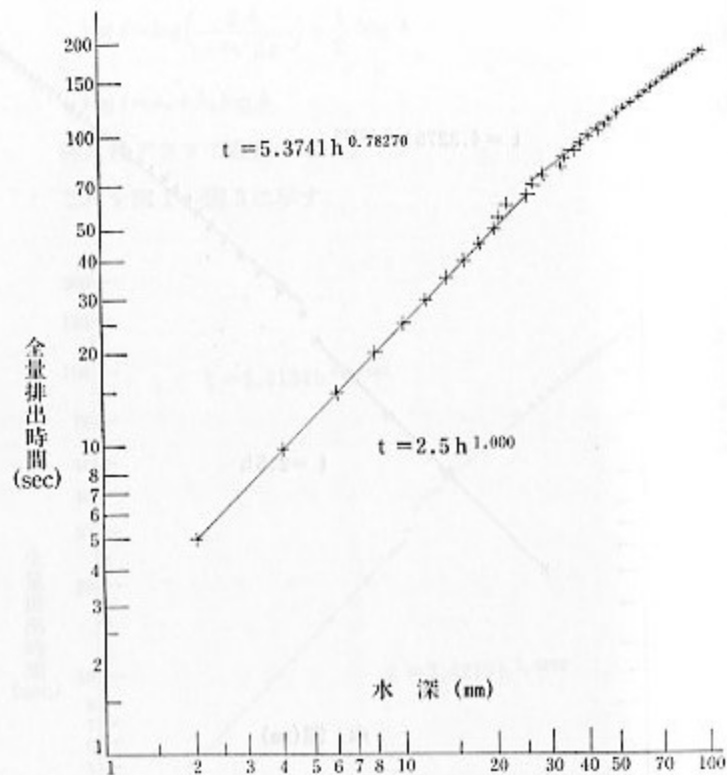


図3 3回目の測定

## b. 2回目の測定

$$\log t = 1.46499095563571 + 0.8344300437497834 \times \log h \quad (8)$$

$$t = 4.3275 h^{0.83443} \quad (9)$$

$$r = 0.9985947373854681$$

(ただし,  $11\text{mm} \leq h \leq 100\text{mm}$ )

$$\log t = 0.9162907318741554 + 0.9999999999999998 \times \log h \quad (10)$$

$$t = 2.5000 h^{1.0000} \quad (11)$$

$$r = 0.9999999999999999$$

(ただし,  $2\text{mm} \leq h \leq 10\text{mm}$ )

## c. 3回目の測定

$$\log t = 1.681594909970616 + 0.7827026135807411 \times \log h \quad (12)$$

$$t = 5.3741 h^{0.78270} \quad (13)$$

$$r = 0.9993142222577189$$

(ただし,  $27\text{mm} \leq h \leq 100\text{mm}$ )

$$\log t = 0.9162907318741546 + 1 \log h \quad (14)$$

$$t = 2.5000 h^{1.0000} \quad (15)$$

$$r = 1$$

(ただし,  $2\text{mm} \leq h \leq 26\text{mm}$ )

以上から, 実験3回目が最も相関性の高いことが分かった。単位は mm-sec である。

(3) 実験式の流量係数  $c$  の決定

(3)式から

$$t = e^{e_0} h^{a_0} \quad (16)$$

上式を(1)式と対比すれば,

$$e^{e_0} = \frac{2A}{ca\sqrt{2g}} \quad (17)$$

$$\therefore c = \frac{2A}{e^{e_0} a \sqrt{2g}} \quad (18)$$

ここに,  $A = 27,312\text{mm}^2$

$a = 21,135\text{mm}^2$

$g = 9,800\text{mm}/\text{sec}^2$

$a_0 = 1.631858840026025$  ((4)式の場合)

$e^{e_0} = 5.1134$  ((5)式の場合)

18式を用いて得られた結果を以下に示す。

(4)式から,  $c = 3.6103$

(6)式から,  $c = 7.6224$

$$\log t = \log\left(\frac{2A}{ca\sqrt{2g}}\right) + \frac{1}{2} \log h \quad (2)$$

$$\log t = a_0 + b_0 \log h \quad (3)$$

両対数グラフで直線となる。

これを図1～図3に示す。

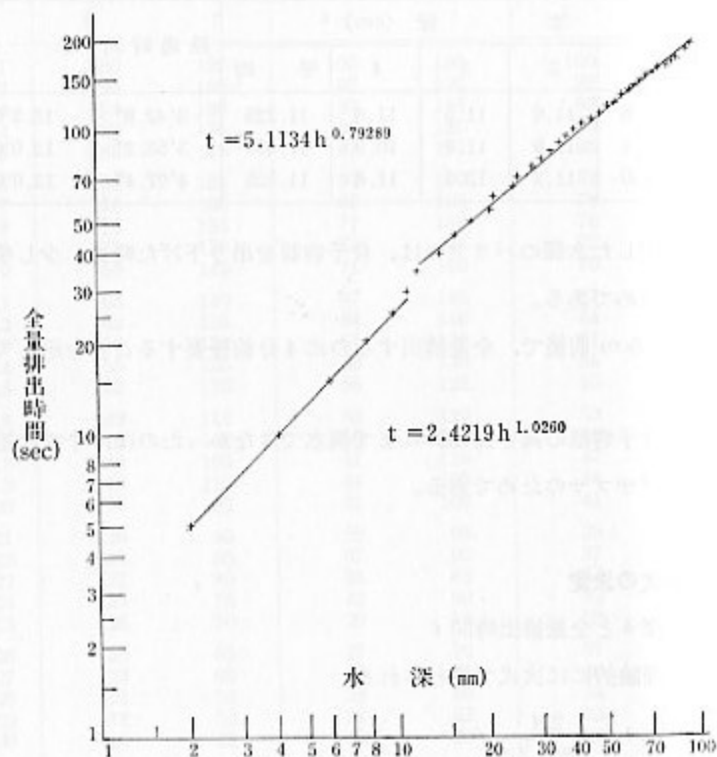


図1 1回目の測定

## (2) 実験式

表6から、1次回帰式を求めれば以下のようである。計算はパーソナル・コンピュータ NEC (PC9801m) によった。

### a. 1回目の測定

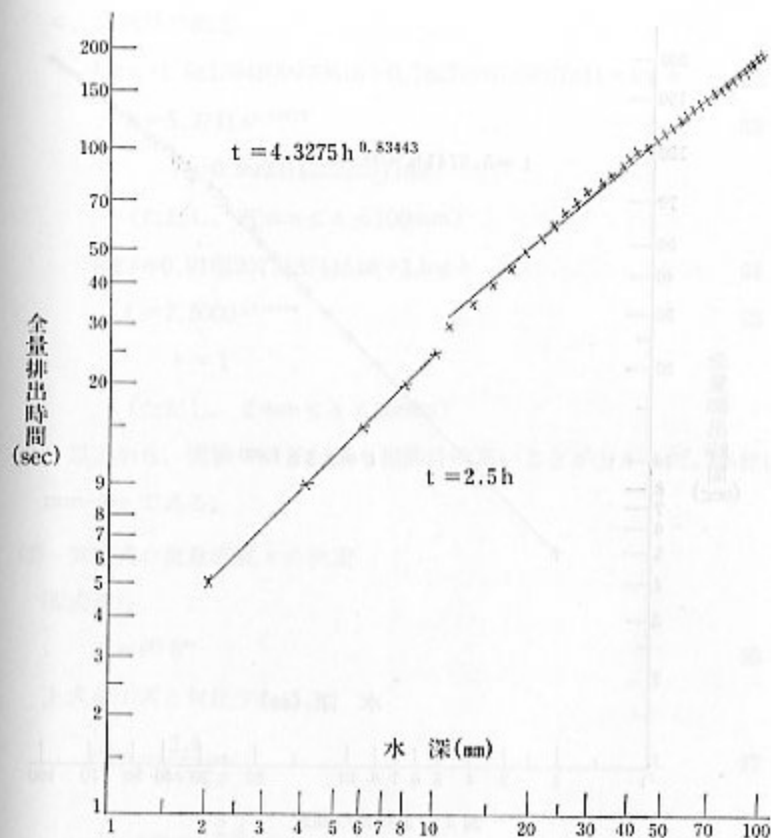


図2 2回目の測定

$$\log t = 1.631858840026025 + 0.7928875749076229 \times \log h \quad (4)$$

$$t = 5.1134h^{0.79289} \quad (5)$$

相関係数  $r = 0.9983174942177604$

(ただし,  $12\text{mm} \leq h \leq 100\text{mm}$ )

$$\log t = 0.8845680645906311 + 1.02603926203989 \times \log h \quad (6)$$

$$t = 2.4219h^{1.0260} \quad (7)$$

$r = 0.998883842448172$

(ただし,  $2\text{mm} \leq h \leq 11\text{mm}$ )



## b. 水深と排出時間

表5から、合子容器の水深と全量排出時間の関係を求めた。これを表6に示す。

表6 水深と全量排出時間 (mm, sec)

No	1 回目		2 回目		3 回目	
	h	t	h	t	h	t
1	100	190	100	195	100	195
2	96	185	97	190	97	190
3	93	180	93	185	93	185
4	89	175	90	180	90	180
5	86	170	87	175	86	175
6	82	165	83	170	82	170
7	78	160	80	165	79	165
8	75	155	77	160	76	160
9	71	150	74	155	73	155
10	68	145	71	150	70	150
11	65	140	67	145	67	145
12	62	135	64	140	64	140
13	58	130	61	135	61	135
14	55	125	58	130	58	130
15	52	120	56	125	55	125
16	49	115	52	120	53	120
17	46	110	50	115	49	115
18	43	105	47	110	47	110
19	40	110	44	105	44	105
20	38	95	41	100	41	100
21	36	90	39	95	39	95
22	33	85	37	90	37	90
23	31	80	34	85	34	85
24	29	75	32	80	33	80
25	26	70	29	75	29	75
26	25	65	27	70	27	70
27	23	60	25	65	26	65
28	21	55	23	60	24	60
29	18	50	21	55	22	55
30	16	45	19	50	20	50
31	14	40	17	45	18	45
32	12	35	15	40	16	40
33	11	30	13	35	14	35
34	10	25	11	30	12	30
35	8	20	10	25	10	25
36	6	15	8	20	8	20
37	4	10	6	15	6	15
38	2	5	4	10	4	10
39	0	0	2	5	2	5
40			0	0	0	0

## (4) 満杯合子容器からの全量排出時間

合子容器の上端がブサブサになっているため、ブサブサの下まで可能な限り水を入れ、その全量排出時間を単純にストップウォッチで計測した。これを表7に示す。

表7 合子容器の全量排出時間

回	水 深 (cm)					経過時間	水 温
	1	2	3	4	平均		
1	10.8	11.0	11.5	11.6	11.225	3'42.8"	12.5°C
2	11.1	11.9	11.9	10.9	11.450	3'53.2"	12.0°C
3	11.0	11.3	12.0	11.8	11.525	4'07.4"	12.0°C

4ヶ所測定した水深のバラツキは、合子容器を吊り下げた時に、少しゆがんでいたためである。

水深 11.5cm 前後で、全量排出するのに4分前後要することを示している。

なお、合子容器の高さ12.80cmまで満水できなかったのは、すでに述べた上端のブサブサのためである。

## 2. 実験式の決定

(1) 水深  $h$  と全量排出時間  $t$ 

理論的には次式で表わされる。

$$t = \frac{2A}{ca\sqrt{2g}}\sqrt{h} \quad (1)$$

ここに、 $A$  : 合子容器の断面積

$a$  : 流出孔の断面積

$c$  : 流出孔の流量係数

$g$  : 重力の加速度

上式の対数をとると

表3 直径と高さ (cm)

	1	2	3	4	平均
上面直径	19.02	17.95	18.90	18.29	18.54
下面直径	18.57	18.865	18.75	18.84	18.756
高さ	13.02	12.845	12.68	12.66	12.80

計測は長さ20cmのノギスによる。

## b. 合子容器の断面積と容積

ゴシの容器を円筒形とみなし

$$\text{平均直径} = \frac{1}{2}(18.54 + 18.756) = 18.648\text{cm}$$

$$\text{断面積} = \frac{\pi}{4}(18.648)^2 = 273.12\text{cm}^2 = 27,312\text{mm}^2$$

$$\text{容積} = 273.12 \times 12.80 = 3,495.936\text{cm}^3 = 3,495,936\text{mm}^3$$

## c. 流出孔の直径と断面積

表4 流出孔の直径 (cm)

	1	2	3	4	平均
直径	0.515	0.525	0.500	0.535	0.51875

計測は長さ20cmのノギスによる。

$$\text{断面積 } a = \frac{\pi}{4}(0.51875)^2 = 0.21135\text{cm}^2 = 21.135\text{mm}^2$$

## (3) 合子容器の水深と排出時間

## a. 水深と経過時間

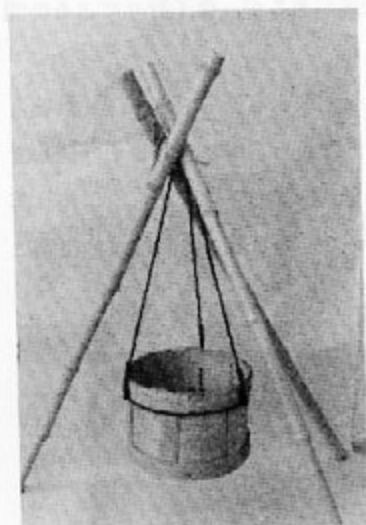
最初水を用いて、水深の減少と経過時間を測定した。水では水深の測定にやや困難さが認められたので、本実験では着色液（ライトグリーンのポスターカラー溶液）を用いて行った。結果を表5に示す。

表5 水深と経過時間 (mm, sec)

経過時間	1 回目	2 回目	3 回目
0	100	100	100
5	96	97	97
10	93	93	93
15	89	90	90
20	86	87	86
25	82	83	82
30	78	80	79
35	75	77	76
40	71	74	73
45	68	71	70
50	65	67	67
55	62	64	64
60	58	61	61
65	55	58	58
70	52	56	55
75	49	52	53
80	46	50	49
85	43	47	47
90	40	44	44
95	38	41	41
100	36	39	39
105	33	37	37
110	31	34	34
115	29	32	33
120	26	29	29
125	25	27	27
130	23	25	26
135	21	23	24
140	18	21	22
145	16	19	20
150	14	17	18
155	12	15	16
160	11	13	14
165	10	11	12
170	8	10	10
175	6	8	8
180	4	6	6
185	2	4	4
190	0	2	2
195		0	0

なお、計測にはコンベックス・ルールとストップウォッチを用いた。

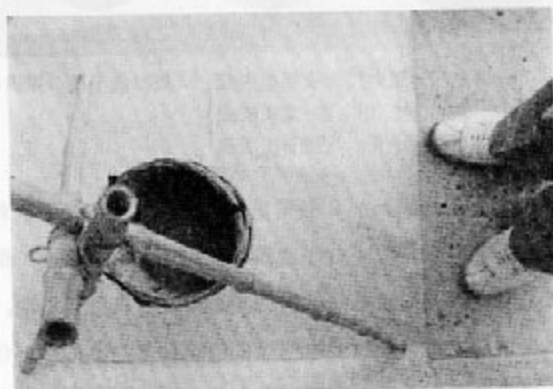
合子しんごと犬上ダム事務所所蔵の合子容器を組み合わせての時間計測をお願いし、その結果報告を昭和63年11月に受けた。その報告書はやや専門的であるが次に掲げる。



1. 合子の容器



2. 横から写したもの——大きさをスケールより推定して下さい



3. 上から写したもの——中央に穴があいていて水を入れると下に漏れていく

## 合子碗および合子容器による時間計測について

昭和63年11月

滋賀県立短期大学 村上 康蔵

## 1. 合子の測定

## (1) 碗の容積

## a. 寸法

表1 碗の寸法 (cm)

碗	上面直径 (cm)			深さ (cm)
	1	2	平均	
a	17.9	18.6	18.25	5.3
b	17.5	17.0	17.25	5.4
c	17.1	16.2	16.55	4.5

計測はコンベックス・ルールによる。

a—歴史民俗資料館 b—土田善丈 c—小菅八重子 各所蔵のもの

## b. 容積

表2 碗の容積 (cc)

碗	1	2	3	平均
a	928.0	935.0	915.0	926.0
b	794.0	783.0	788.0	788.3
c	621.0	621.0	631.0	624.3

計測は500ccのメスシリンダーによる。

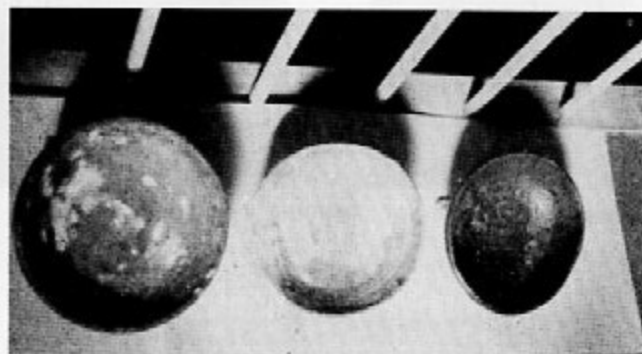
## (2) 合子容器の測定

## a. 直径と重さ

## 19 中世の水利に使った合子

町史上巻 p.899 《合子》についての記述があるが、合子計りによる時間計測について詳述することにする。

合子というのは番水を各溝または田圃へ配水する係名であり、また椀と容器により時間を計る合子計りの椀のことである。すなわち合子（椀）で何杯か水を容器（写真 p.291）に入れると、容器の底の穴から水が流れ落ちる。田圃により合子何杯の水と決めていて、その落水時間内だけ田圃に水を入れるということによって時間を計ったのである。



{ 一番左 歴史民俗資料館所蔵 } (種村儀平氏の提供による)  
 { 中央 土田善丈氏所蔵 }  
 { 一番右 小菅八重子氏所蔵 }

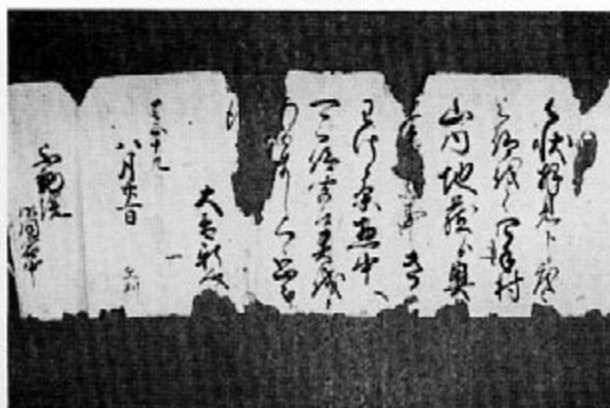
ところで町内で合子（椀）が3個発見された（a 歴史民俗資料館、b 土田善丈、c 小菅八重子各所蔵）。合子容器は犬上川ダム事務所できりることができたので、合子計りによる時間計測がどのようにできるか、その道の研究者滋賀県立短期大学教授村上康蔵氏に依頼した。ところが合子（椀）と合子容器とは本来セットになっていたものと思われるのに、町内では組ミになった合子椀、容器が発見されなかった。そこで、町内発見の3個の合

## 二 地方文書目録





大音新介が不動院へあてた文書（多賀共有文書）



伊香郡大音の出身と見られる大音新介から不動院に宛てた文書で、多賀の不動院では、多賀・四手間の山論解決法を新介を介して運動した。新介の二年越しの努力の結果解決したので、早速惣中へその旨達するようにとの新介の督促状である。

天正19年（1591）8月21日の日付。

この書は木下長治氏が掘り出したもののひとつで、得々と新介のことを語っていた彼の姿が彷彿とする。（305・569ページ参照）

松宮家に残る家業の御掟書



多賀の松宮家は由緒正しい旧家で、家業は代々油業である。

古文書の多い家柄でもあるが、この天保4年（1833）5月の御掟書と文久3年（1863）9月、の油絞り掟と名前帳が圧巻である。

いずれも家業油絞り掟が細々と記しており、最後の名前帳には近隣の同業者230名の名前が残っていて貴重である。（341・761ページ参照）

## 概 説

この文書は『多賀町史』編さんに当たり調査収集した各区の公民館・寺院など公の場所、ならびに各家庭に所蔵されていたものである。

各家の文書には公文書の所蔵も多く、私文書の中にも公的価値の高いものがあるので、できるだけ公的性質のあるものを考えて整理した。

この文書は地方文書または庄屋文書と言われているもので、時代的には近世江戸時代と近代明治期を中心とする文書である。なおこの目録は次の項に留意している。

1 収集文書のうち、現物またはコピー資料が本資料館に所蔵しているものに限る。

2 収集文書のうち、人権またはプライバシーに関するもの、たとえば貸借文書、売券証書、懲罰文書な

どはこれを除外している。

3 山論や水論の文書は一方の立場に立って作成されていることを考慮すること。

4 収集文書は必要に応じて適宜採用し目録としたが、未解明のものについては、今後の研究に待たねばならない。

### 解説について

解説の初めにはその文書の背景となる地域の自然や歴史を略記し文書の理解に役立つようにした。

解説内容はその文書に記されている中の主要なものの概略について記したが、他に多くの興味ある資料も紙面の都合で略したものもある。

### 凡 例

1 この目録は二一所在箇所、一六四九点を収録したものである。

2 配列は所蔵者ごとに年次を追って記したが、主題別に分けた場合もある。

3 文書の記載方法は次のとおりである。

(1) 整理番号

所蔵者ごとに目録の掲載順に付した通し番号である。

(2) 文書番号

・ 整理の段階で文書に付した番号である。  
・ 綴りなど複数の文書を含む場合は一括したものに一つの番号を与え、各文書には枝番号を記した。

(3) 史料名

・ 冊子の場合は表題、状物の場合は初行「差上申一札之事」、「乍恐以書付…」などと記したが、それのみでは内容不明のもの、および表題のないものは適宜に、括弧をもって補足した。

(4) 年代

・ 原則として文書の作成年月日とし、欠年の場合は空欄としたが、内容から推定して「何々時代」とした場合もある。

・ 綴りなどはその中のもっとも古いものを基準にして編集した。

・ 年号のほかに西暦年代を入れた。

(5) 差出(作成)人・請取人

・ 肩書きはすべて載せることを原則としたが、スペースの都合で略記した。

・ 複数の場合は一名のみ記しほか何名とする事を原則とした。

・ 典籍類は著述者・出版者等を記した。

(6) 形態・数量

・ 堅 料紙を縦に二つ折りにし綴ったもの。明治以降の印刷物は同形のものを含む。

・ 横 料紙を横に二つ折りにし綴ったもの。

・ 状 一紙または料紙を縫いだしたもの。

目次

- 1 (一―一) 多賀共有文書
- 2 (一―二) 松宮正宜家文書(多賀)
- 3 (二) 四手共有ならびに教円寺文書
- 4 (四) 八重練共有文書
- 5 (五) 上田柳松家文書(桃原)
- 6 (七―一) 中川一三家文書(中川原)
- 7 (七―二) 野村正助家文書(中川原)
- 8 (一―三) 栗栖共有文書
- 9 (一―六) 久徳共有文書
- 10 (一―九) 土田縫夫家文書(土田)
- 11 (二〇―一) 敏満寺共有文書
- 12 (二〇―二) 山口 職家文書(敏満寺)
- 13 (二〇―三) 堀川惣一郎家文書(敏満寺)
- 14 (二―二) 川相共有文書
- 15 (二―三―一) 藤瀬共有文書
- 16 (二―三―二) 城貝能夫家文書(藤瀬)

字 名	番号	字 名	番号	字 名	番号
多賀	一	栗栖	一三	藤瀬	二三
四手	二	久徳	一六	富之尾	二四
八重練	四	土田	一九	楠崎	二五
桃原	五	敏満寺	二〇	太杉	三一
中川原	七	川相	二二	保月	三六

・ 綴 別々に作成された複数の文書の綴り。  
・ 図 絵図、印刷された地図など。

4 漢字は原則として常用漢字を使い誤字は訂正して記載した。

5 各所蔵者には便宜上番号を付した。大字の番号―所蔵者の番号とした。所蔵者の番号は整理の完了した順番である。大字の番号は次のとおりである。

- 17 (二四) 富之尾共有文書
- 18 (二五) 重森 駿家文書(納時)
- 19 (三一) 大杉共有文書
- 20 (三六一二) 保月共有文書
- 21 (三六一二) 保月山論文書(滋賀県立図書館)

注 上段括弧内は大宇番号1所蔵者番号である。滋賀大  
学経済学部史料館に本池文書が所蔵されている。

大宇番号	所蔵者番号	文書名	備考
三六一二	1	保月山論文書	
三六一二	2	保月山論文書	
三六一二	3	保月山論文書	
三六一二	4	保月山論文書	
三六一二	5	保月山論文書	
三六一二	6	保月山論文書	
三六一二	7	保月山論文書	
三六一二	8	保月山論文書	
三六一二	9	保月山論文書	
三六一二	10	保月山論文書	

### 1 多賀共有文書

多賀村は多賀大社の門前町として誕生し、多賀庄の中心として発達してきた。

江戸時代当初は多賀は彦根藩領と多賀大明神の朱印地の神領から成っていたが、慶安四年(一六五二)彦根藩が多賀村の領のうち一四七石余を附地として寄進した。これにより多賀社の神領はおよそ五〇〇石とな

多賀村石高の推移

村	年度		領主	石高	領主	石高	藩	合併・改称
	寛永二一(一六三四)	元禄一四(一七〇二)						
多賀	五四九・四〇〇	四〇二・一四三	井伊	四〇二・一四三	井伊	四〇二・一四三	彦根	多賀村
大尼子	三五二・七三五 二九四・四八〇	一四七・二五七 三五二・七三五 二九四・四八〇	井伊 ②多賀 ③大明神 井伊	② ③ 不動院	② ③ 彦根	② ③ 彦根	彦根	

②は朱印地神領 ③彦根藩寄進の新神領で黒印地または御付地ともいう。

『滋賀県市町村沿革史』により作成  
た。多賀の石高の推移は次表のとおりである。  
当多賀の神領には朱印地・御付地・四ツ屋に、彦根藩領多賀村にそれぞれ庄屋・横目がいるという四つに細分され、行政が行われていた。そのリード役は朱印地神領の庄屋で、神社内の不動院の影響が大であったと言われている。

藩領多賀村の範囲や戸数については時代によって多少の変化があったと思われるが寛政元年(一七八九)の「殿様しょうぶわけ配分帳」によると次のようであ

桜町 二六戸 向山上町 二二戸  
 下之町 三一戸 宮戸 八戸  
 新町 二〇戸 かさや 四戸  
 向山下町 一五戸 計 一二五戸  
 元禄八年(一六九五)の人口は七五七人で、戸数が一七〇(井伊家文書)とあるのは新神領(附地)を含めての調査であろう。

村人の生業は農業が主であったが、その傍ら土産物の商業や工業に従事する人、札配り(坊人)という神社・寺院のもとで働く人など多賀神社にかかわる人々等多彩な職業が見られ、都市風に変化していった。多賀神社へは全国各地から多数の参詣人が訪れ、大名や貴顕諸公の祈禱のための社参も多く、村の風俗・習慣や生活様式に大きな変化をもたらした。こうした多賀神社を中心として発展した門前町は、神都としての文化を作りあげ、周辺地域へ伝播していった。

明治一二年大尼子合併後の多賀村村勢 『滋賀県物産誌』

一 人口	一二四八人
二 戸数	二五六戸
三 職業	農業(二二七戸) 工業(一九戸) 商業(二〇戸)
四 面積	総反別 二五九町二反七畝 八歩 田地 九五町三反八畝一九歩 畑地 一一町三反二畝二八歩 宅地 九町七反二畝一七歩 山林地 一〇四町九反六畝 七歩 雑地 六町四反九畝 八歩 除税地 三一町三反七畝一九歩

ヶ畑村が合併して現在の多賀町となった。

このようにして一単位細胞として発足した多賀村は次々に近隣の村々と合併して、多細胞の広大な面積の町に発展していったが、常に旧多賀村はその核として発展してきた。

この文書は藩領多賀村時代からの村全体の文書と桜町や向山町の文書で、そのほとんどは桜町延命地藏堂

た。

多賀村は明治以降は旧神領の庄屋を廃止して、一括して多賀村戸長による行政となった。

明治五年(一八七二)一〇月、県下に区制が施行され、多賀村は大尼子・敏満寺・四手・八重練・大岡村の各村とともに犬上郡第一五区になった。

明治一二年(一八七九)三月、多賀村は大尼子村と合併して、最初の合併村多賀が誕生した。その時の村勢を示すと次ページのようにであった。

明治一八年(一八八五)七月、多賀村は敏満寺・四手・八重練・大岡の各村とともに多賀村外四カ村連合戸長役場を設置した。

明治三〇年(一八九五)四月、多賀町と大滝村・昭和三〇年(一九五五)四月、多賀町と久徳村・芹谷村が合併して多賀町となった。

に保管されていたものである。

多賀共有文書の特徴は主要文書がシリーズとして、いくつかの系列のもとに多年にわたって累積されていることである。次の文書はとくに数多く残っている。

一	覚(伝馬掛り銀)多賀村	宝永三―安政五	六一通
二	歳次目録(貢租関係費)同右	寛政三―明治九	四七冊
三	多賀大社御祭礼役割覚帳同右	文化五―嘉永三	五八冊
四	縄ない夜業帳	天保二―慶応四	一九冊
五	多賀講掛銭帳	天保五―明治四五	五〇冊
六	地蔵堂費銭帳	天保八―明治四五	四五冊
七	地蔵堂金帳	明治一七―明治四〇	二四年間
八	御祈禱掛金簿向山下町	明治二一―大正一五	一七年分

○ 伝馬掛り銀 多賀村は助郷人夫の出動は無かったが、伝馬賃は石高に応じて貢納していた。この下ヶ札の裏面は領収書である。

○ 歳次目録は多賀村に課せられた千石扶米やお情米・救助米等の高掛物や村役人の給料や旅費など村



の会計簿である。

○ 多賀大社御祭礼役割覚帳は祭礼行事参加者の割り付け帳である。

以上は多賀村の村関係文書である。

○ 縄ない夜業帳は拝借米返済の夜なべの記録である。

○ 多賀講掛銭帳・地藏掛金帳などは桜町と向山下町の記録で、神仏信仰に基づく講組織の掛金や賽銭で町内の行事が運営されていた。それとともに余剰金は貸し付けなどの金融も行ってた記録帳である。

多賀神社にはしばしば、將軍や藩主の祈禱や参詣が行われた。天保五年(一八三四)一月の「御公方様御祈禱御用日記」には代拝者をはじめ一九四人の一行が多賀村の一七軒に分宿し、経費は七二〇匁五分四厘と誌し、頂戴物は六八匁三分四厘差引六五二匁二分と記されている。夜具借集め帳も残っており、こうした行事がたび重なり、経費と労力負担は大変だったと思わ

れる。

寛政元年(一七八九)六月の「殿様御志ようぶわけ(遺品の分配)配分帳」は遺品として六俵の米を一戸につき七五文ずつ町ごとに配分した記録である。この文書によって前に記したが、寛政元年(一七八九)の多賀村構成の町名(小路名)と戸数が明らかになった。貴重な資料である。これは井伊直富(安政七年(一八六〇)七月死去)の供養と考えられるが、殿様と庶民のゆかしい交情の記録といえよう。

特異な帳簿類としては、慶安四年(一六五二)九月七日付けの新神領石高一四七石余の土地台帳がある。その他にも、文書目録九番「筋奉行江申付候郷中条目」、三七番「多賀村四手村立合山取替(証文)之写」、一二四番「松原蔵、御用米歳年貢米納入記録」、四六番「町中定書と重要事項記録」などは貴重な文書である。

一 多賀共有文書目録

整理文書 番号	番号	史料名(内容)	形態数量	年 代	差出(作成)人	請 取 人
1	149	大音新介書状	状 一	天正一九・八・二二 一五九二	大音新介	不動院御国宿中
2	1	小名寄之帳	堅 一	寛永九・一一・二二 一六三二	庄屋仁左衛門	
3	2	高百四拾七石式斗五升七合新御 神領 犬上郡多賀村内	堅 一	慶安四・九・七 一六五一	大久保弥五右衛門 吉川軍左衛門	
4	4	地下新当地之帳	堅 一	延宝二・二・一一 一六七四	当庄屋助左衛門 ほか一五名	
5	5	御換地帳	堅 一	元禄三・九 一六九〇	多賀村庄屋 次兵衛	
6	150	一札之事(宿なし雲助・小哥淨 留理諸勸進者等に宿をしない)	状 一	正徳五・八・二〇 一七一五	彦兵衛ほか四名	(庄屋横目)
7	6	多賀名寄帳	堅 一	享保二・一 一七三六		
8	7	御用銀覚帳	横 一	寛延三・一二 一七五〇	犬上郡多賀村	



25	24	23	22	21	20	19	18	17
16の3	16の1	16②	3	15	14	175	175	152
乍恐以書付御願奉申上候(他国へ出持の許可願)	覚(宣生堂の所有田の年貢納入について)	口上(生活難渋につき他国へ出持許可願)	立会山写(奉行の尋により答えた寛文六年覚書きの写し)	村指引帳	金銀出入村指引帳綴	覚(米の払下値段)	覚(松原御歳年貢納入次第)	御常式御用銀御返済割渡帳
状一	状一	状一	堅一	横一	綴二冊	堅一	横一	横一
安永三・八	安永三・八・五	安永三・八・五	安永三・七・九 一七七四	安永一・一二	安永一・一二 一七七二			明和八・二・一七 一七七一
御附地栄正ほか二名	尊勝院仕僧 普明坊	尊勝院仕僧	新御神領吉田氏	同右	庄屋横目組頭中			庄屋林右衛門
奉行			奉行					

16	15	14	13	12	11	10	9	番号 番号	整理 番号	史 料 名(内容)	形態 数量	年 代	差出(作成)人	請 取 人
13	175	176	12	11	10	9	8			筋奉行江中付候郷中条目	堅一	宝暦六・二・一二 一七五六	木俣土佐ほか五名	筋奉行
										宝暦九年卯御用銀割帳	横一	宝暦九・一 一七五九	村中	
										御引替御用銀割合帳	横一	宝暦一〇・一〇 一七六〇	庄屋 林左衛門	
										辰巳御用銀御返済割戻帳	横一	宝暦一三・一 吉日 一七六三	庄屋善兵衛	
										御成御用銀割渡帳	横一	宝暦一四・五・二八 一七六四	同右	
										(住居と住人調査)	横一	明和二・九 一七六五	同右	
										覚綴(金額受取証)	堅一	明和三 一七六六	車戸半右衛門そのほか	多賀村役人
										御用銀御返済割渡覚帳	横一	明和四・二 一七六七	庄屋善兵衛	

## 1 多賀共有文書

42	41	40	39	38	37	36	35	34
27	外4	26	156	155	25	154	24	135
多賀大社御祭礼役割割寛帳綴	御本山講掛銭	夜なべ何によら須出来銭高	(建築工事の見積書)	指上申御検見前手形之事(横見を受ける心構え)	多賀村四手村立合山取替(証文)之写	乍恐以書付奉申上候(多賀村と四手村との山論仲介に付報告)	(田畑所在面積確認帳)	御教米小前割渡シ帳
綴 五八冊	横七	横一	縦一	状一	縦一	状一	縦一	横一
文化五・四・一六 一八〇八	文化二年九月 一八〇五	享和三・八・一七	享和三・三 一八〇三	享和二・九 一八〇二	享和一・一一・二三 一八〇一	寛政一一・一二・三二	寛政一一・二 一七九九	寛政九・一一・二六
多賀村各年次庄屋		庄屋九郎右衛門		多賀村庄屋 九郎右衛門	四手村庄屋惣左 衛門ほか三名	大尼子村伝左衛 門	四手村庄屋惣右 衛門ほか四名	庄屋林右衛門
					多賀村庄屋九郎 右衛門ほか二名	奉行		

33	32	31	30	29	28	27	26	整理 番号 番号 番号
23	22	21	171	20	19	18	外15	
畑屋敷御検見帳	御成御用銀割	歳次目録(貢租・村役人給料その他の村会計)	御触書(書がましき事や博奕の禁止について)	殿様御志ようぶわけ配分帳	御公方様御祈禱御用日記	公儀御触書写	覚(伝馬銀)綴	史料名(内容)
縦一	横一	綴 四七冊	横一	横一	横一	縦一	綴 六二冊	形態数量
寛政九・九 一七九七	寛政五・三 一七九三	寛政三	寛政三・一・二一 一七九一	寛政一・六 一七八九	安永七・一・一三 一七七八	安永六・二・四 一七七七	安永三 一七七四	年 代
犬上郡多賀村	庄屋林右衛門	犬上郡多賀村庄 屋林右衛門	代官所 片木弥 次兵衛	庄屋林左衛門		庄屋・横目	舟宮・大藤	差出(作成)人
						真如寺 西徳寺	多賀村庄屋横目	請取人

59	58	57	56	55	54	53	52	51
168	55	54	43	39	35	160	162	34
御遣金割渡シ帳	殿様御参詣諸事扣帳	殿様御参詣諸事扣帳	地藏堂賽銭帳綴	多賀大社修復講仕法帳	多賀講掛銭帳綴	夜具割渡シ帳	夜具借集メ帳(人足賃)	御祈禱入用高割帳
横一	横一	横一	綴 四五冊	縦一	綴 五〇冊	横一	横一	横一
嘉永四・一・一二 一八五一	嘉永二・九・三〇	嘉永二・八・二〇 一八四九	天保八・一・二〇 一八三七	天保六年八月 一八三五	天保五・一・二〇	天保五・一・一二	天保五・一・一二	天保五・一・一二
多賀村庄屋 半三郎	庄屋彦三郎		当番林蔵・長次 源右衛門					庄屋四郎八

50	49	48	47	46	45	44	43	整理 番号 番号 番号	史料 名(内容)	形態 数量	年 代	差出(作成)人	請 取 人
161	32	172	31	210	29	159	157		史 料 名(内容)	形 態 数 量	年 代	差 出(作 成)人	請 取 人
御公方様御祈禱御用日記	帳 御公方様六十一歳祈禱入用高割	御用銀割合上納帳	綴 ない夜業帳綴	町中定書と重要事項記録	日光御社参御用金	御公方様御祈禱御用日記	(掟廻文)		史 料 名(内容)	形 態 数 量	年 代	差 出(作 成)人	請 取 人
横一	横一	横一	綴 一九冊	縦一	横一	横一	状一		史 料 名(内容)	形 態 数 量	年 代	差 出(作 成)人	請 取 人
天保五・一・一 一八三四	天保四・一・九 一八三三	(天保三・一)	天保二・一・二〇 一八三一	文政二・一・五 一八二八	文政七 一八二四	文化二・一・二一 一八一四	文化七・六 一八一〇		史 料 名(内容)	形 態 数 量	年 代	差 出(作 成)人	請 取 人
		庄屋			庄屋所平	庄屋四郎兵衛	中筋奉行		史 料 名(内容)	形 態 数 量	年 代	差 出(作 成)人	請 取 人

76	75	74	73	72	71	70	69	68
178	177	68	71	83	65	82	64	62
多賀村大綱場丈量野帳	送り籍正(送籍証)	山年貢取立帳	兵人生月日調帳 (軍隊入營者の生年月日調査)	等級取調帳	御見分村中案内番附帳	地目地位等級調書綴	戸籍字(戸籍記載具体的例示)	近江国犬上郡大尼子村戸籍
縦一	縦一	横一	横七	横一	横一	縦二	縦一	縦一
明治七・五・三一	明治七・一	明治七・一 一八七四	明治六・五 一八七三		明治五	明治五・一〇 一八七二	明治四・一一・四 一八七一	明治二 一八六九
戸長小菅宇平次 総代神島九平・ 田中曾平	多賀村戸長 田中曾平		多賀四ヶ所	多賀村戸長		犬上郡第一五区 多賀村		犬上郡大尼子村
	近江国犬上郡第 八区正副戸長							

67	66	65	64	63	62	61	60	整理 番号 番号
61	60	外1	170	58	169	57	56	史 料 名(内容)
御検見ニ付不取分	不参免帳	以書付御届奉申上候 (立会山山論)	殿様御逕在ニ付極難決者頂戴割 帳	指上申畑請手形之事	公方様御本家御祈禱帳	諸色買上并渡シ方帳	江戸御屋敷御焼失御普請ニ付御 用金帳	史 料 名(内容)
縦一	横一	状一	横一	縦一	横一	横一	横一	形 態 数 量
元治一・一二 一八六四	文久三年一月 一八六三	安政三・二・三 一八五六	安政二・四・一五 一八五五	嘉永六・九	嘉永六・一・一一	嘉永六・一・一一 一八五三	嘉永五・六 一八五二	年 代
庄屋源助		多賀庄屋林右衛 門ほか一名	庄屋勘平横目源 介	多賀村庄屋 兵右衛門	多賀村庄屋 平右衛門	同右	庄屋兵右衛門	差 出(作成)人
		弥次兵衛						請 取 人

93	92	91	90	89	88	87	86	85
94	98	96	93	92	76	91	73	70
田方地稅半額延納願書	(多賀神社境外征山地区調査依頼)	官林松茸入札書	盆踊興行御願書	御布令改正願	合併地目地位等級下調書	証(地券証印稅請取)	御拝借地願書	明治八年起返一筆限取調書
綴一	綴一	堅一	狀一	狀一	堅一	狀一	狀一	堅一
明治一一・一一・二五	明治一一・一〇・一〇	明治一一・九・二三	明治一一・八・一五 一八七八	明治九・一一	明治九・一〇	明治九・一〇・二七 一八七六	明治九・一・二四	明治八
多賀村惣代山地 善八注か	滋賀県地租改正 事務所係	多賀村六八番 石田善平	多賀村一九三番 屋敷重田重三郎		大尼子村地主総 代岸部伝平	滋賀県權令 籠手田安定	犬上郡多賀村松 宮与八注か一名	多賀村地主総代 北村志喜武
滋賀県令 籠手田安定	犬上郡第一五区 正副区長	滋賀県令 籠手田安定	彦根警察署		滋賀県權令 籠手田安定	多賀村長 本池篤司		滋賀県權令 籠手田安定

84	83	82	81	80	79	78	77	整理 番号
69	72	180	147	174	179	67	S 1	整理 番号
開拓地御下ケ渡御願書	山田神社日向神社取調書二冊相 添御届書	義倉積立金の処分	証(官木払下料)	町内経費請求書綴	石代金納額	貢米石代金を以上納仕度願書	証(旧彦根藩貸下金一時返納金 請取)	史料 名(内容)
堅一	狀一	堅一	狀一	綴二	堅一	堅一	狀一	形態 数量
明治八	明治八・七・八	明治八・二・七 一八七五	明治七	明治七	明治七・一一・一四	明治七・一一・一五	明治七・七・一四 一八七四	年 代
犬上郡多賀村 日比野八重吉	多賀神社祠官 宇津木久岑	滋賀県租稅課	滋賀県參事 籠手田安定	万兵衛他ほか	多賀村地主總代 小菅宇平次ほか 三名	犬上郡多賀村本 池甚弥ほか五二 名	滋賀県參事 籠手田安定	差出(作成)人
	滋賀県權令 籠手田安定	犬上郡古沢村ほか 六六村正副戸長	多賀村 近藤彦治郎	椋町町内衆		滋賀県令 松田道之	多賀村車戸喜平	請 取 人



110	109	108	107	106	105	104	103	102
84	146	113	115	117	181	101	109	77
合併地目地位等級下調帳(明治一二年多賀村・大尼子村合併)	(多賀村・大尼子村統計反別)	徴兵適齢者取調	師範学校生募集	牛馬売買鑑札御願書	警察署ノ位置名称ト所轄表	興行御願書	羅卒設置仕度御願書	証(地券証式通送付)
豎一	豎一	豎一	豎一	豎一	豎一	状一	状一	状一
	明治一二	明治一二・一〇・一〇	明治一二・一〇・九	明治一二・七・二八	明治一二・六・四	明治一二・六	明治一二・六・二九	明治一二・六・一六 一八七九
地主總代 戸長福戸長	多賀村・大尼子 村 武田春夫	犬上郡長 武田春夫	所 滋賀県犬上郡役	敷隅田曾平	滋賀県令 籠手田安定	多賀村興行願人 市田十三郎	多賀村惣代・元 大尼子村惣代	滋賀県地租改正 事務係
		戸長 多賀町組合各村	多賀村戸長役場	犬上郡長 武田春夫	多賀村	同 右	滋賀県令 籠手田安定	犬上郡多賀村戸 長

101	100	99	98	97	96	95	94	整理 番号 番号
125	81	103	122	127	111	104	97	史料 番号
天然痘取調總計	満二五歳以下種痘取調扣	(合併村名「多賀村」と改称)	酒類受卸売営業願書	口上(高宮無賃橋架橋趣意)	官林損木払下について	記(田畑等の筆数と地主名)	部分木植付願	史料 名(内容)
豎一	豎一	状一	豎一	豎一	豎一	豎一	状一	形態 数量
明治一二・六・一三	明治一二・五・二〇	明治一二・四・一〇	明治一二・四・一四	明治一二・三	明治一二・三・四	明治一二・一・一四 一八七九	明治一二・一・一 一八七八	年 代
点検役種痘区松 下文篤村か一名	多賀村戸長役場	滋賀県令 籠手田安定	犬上郡多賀村願 人神鳥庄九郎	高宮村橋相統免 起人石原甚五郎	代大書記酒井明	場 (多賀戸長)役	犬上郡多賀村 山地善八	差出(作成)人
滋賀県令 籠手田安定		犬上郡第一五区 多賀村大尼子村	滋賀県令 籠手田安定		犬上郡第一五区 正副区長	犬上郡第一五区 長	滋賀県令 籠手田安定	請 取 人

126	125	124	123	122	121	120	119
S 4	S 3	S 2	219	211	63	219	220
覚(検見帳)	西徳寺縁起	(松原蔵、御用米歳年貢米納入記録)	多賀杓子の来由	大上郡多賀村大字多賀山林取締申合せ規約	御堂屋根直シ入用扣帳	『謡曲「多賀」』	瓜生家系譜第拾参冊
状一	状一	縦一	状一	状一	横一	縦一	縦一
万治一・一一・二八 一六五八	寛正三・六・八 一四六二			明治四二・一・五 一九〇九	明治四〇 一九〇七	明治三五・三・二〇 一九〇二	明治三三・一
河添伝□□	権大僧都慈賢	(多賀村)	多賀大社宮司 芳賀真咲		西徳寺世話方	大字多賀 大口祀善	有照

118	117	116	115	114	113	112	111	整理 番号	文書 番号	史料名(内容)	形態 数量	年 代	差出(作成)人	請 取 人
外5①	215	186	213	143	135	134	148			史料名(内容)	形態 数量	年 代	差出(作成)人	請 取 人
										証(多賀講金領収)綴	綴一	明治三三・一・二〇 一九〇〇	多賀講總本部	桜町惣代
										御祈禱掛金簿	綴一	明治二二・五・一	多賀村向山下町	
										明治二二年度納税領収書綴(村費・備荒公儲金・地方税等)	綴一	明治二二・三・一八 一八八九	多賀村役場	桜町
										地蔵講掛銭帳	綴二冊	明治一七・七・二四 一八八四	向山下町	
										(他町村寄留者天然痘接種名簿)	縦一			
										証(送籍証受領)	状一	明治一三・三・二五 一八八〇	多賀村市田寅二郎 代安田勘兵衛	同右
										(開墾地并荒地鑑下実地検査に 県官巡回)	状一	明治一三・三・二五 一八八〇	大上郡役所	多賀村戸長役場
										札場新築・願誓堂修繕地蔵堂瓦 葺替工事費	綴一		多賀村桜町	









整理番号	整理枝番	史料名(内容)	形態数量	年代	西曆	作成
42	(1)	多賀大社御祭礼役割覚帳	五	文化五・四・一六	一八〇八	庄屋九郎右衛門
"	(2)	"	七	七・四	一八一〇	"
"	(3)	"	八	八・四・二三	一八一〇	"
"	(4)	"	六	九・四・一六	一八二二	"
"	(5)	"	五	一二・四・一五	一八一五	庄屋善兵衛
"	(6)	"	六	文政二・四・二四	一八一九	庄屋所平
"	(7)	"	六	四・四・四	一八二一	"
"	(8)	"	六	四・四・一四	一八二一	"
"	(9)	"	六	六・四・一九	一八二三	"
"	(10)	"	五	七・四・二三	一八二四	"
"	(11)	"	四	八・四・二三	一八二五	"
"	(12)	"	五	九・四・一九	一八二六	庄屋源右衛門

42 多賀大社御祭礼役割覚帳

目録	八	九年	一八七六	戸長田辺忠次郎
----	---	----	------	---------

整理番号	整理枝番	史料名(内容)	形態数量	年代	西曆	作成
31	(1)	子之年目録	一	嘉永五年	一八五二	取立役源介
"	(2)	丑之年目録	二	"	一八五三	取立役林右衛門
"	(3)	寅之年目録	二	"	一八五四	庄屋
"	(4)	卯之年目録	一	安政二年	一八五五	庄屋勘兵衛
"	(5)	辰之年目録	一〇	"	一八五七	"
"	(6)	巳之年目録	一	"	一八五九	庄屋源介
"	(7)	未之年目録	二	"	一八六〇	"
"	(8)	申之年目録	二	万延一年	一八六一	庄屋勘兵衛
"	(9)	酉之年目録	一	文久一年	一八六二	"
"	(10)	戌之年目録	一	"	一八六五	庄屋源助
"	(11)	丑之年目録	一	慶応一年	一八六八	庄屋曾平
"	(12)	辰之年目録	一	明治一年	一八七〇	"
"	(13)	午之年目録	一	"	一八七〇	庄屋田中曾平
"	(14)	未之年目録	一	"	一八七一	庄屋田辺忠治郎
"	(15)	申之年目録	一	"	一八七四	庄屋田辺忠治郎
"	(16)	酉之年目録	一	"	一八七五	戸長宮崎大造

44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28
七	八	七	七	七	七	七	八	七	七	七	五	六	五	六	五	
六・四・一八	五・四・一三	四・四・一三	三・四・二〇	安政二・四・一四	七・四・一四	六・四・二〇	五・四・一四	四・四・一四	二・四・二〇	嘉永一・四・一五	四・四・一二	三・四・二一				
一八五九	一八五八	一八五七	一八五六	一八五五	一八五四	一八五三	一八五二	一八五一	一八四九	一八四八	一八四七	一八四六				
庄屋源助	庄屋勘兵衛	横目源助	庄屋勘兵衛	横目源助	庄屋勘平	横目源助	庄屋勘平	横目源介	庄屋勘兵衛	庄屋忠次	庄屋兵右衛門	庄屋兵右衛門				

42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13		
多賀大社御祭礼役割覚帳																															
史料名(内容)																															
形態数量	横																														
年代	文政一〇・四・一三	一・四・一三	一・四・一三	一・三・四・一九	天保二・四・二四	四・四・一八	七・四・一八	八・四・二三	九・四・一七	一〇・四・一七	一二・四・二三	一三・四・一六	一四・四・八	一五・四・二三	弘化二・四・一六																
西曆	一八二七	一八二八	一八二九	一八三〇	一八三一	一八三三	一八三六	一八三七	一八三八	一八三九	一八四一	一八四二	一八四三	一八四四	一八四五																
作成 人	庄屋原右衛門																														

整理番号	整理枝番	史料名(内容)	形態数量	年代	西暦	作成
47	(1)	縄なひ夜業帳	六	天保二・一・二〇	一八三一	
	(2)	縄夜業帳	六	四・一・吉日	一八三三	
	(3)	縄なひ夜業帳	六	八・一・二〇	一八三七	
	(4)	縄なひ夜業帳	六	一〇・一・吉日	一八三九	
	(5)	縄なひ夜業帳	六	一三・一・吉日	一八四二	
	(6)	縄なひ夜業帳	五	一四・一・吉日	一八四三	
	(7)	縄なひ夜業帳	六	一五・一・二〇	一八四四	
	(8)	縄なひ夜業帳	六	弘化二・一・二〇	一八四五	
	(9)	縄なひ夜業帳	六	三・一・吉日	一八四六	
	(10)	縄夜業帳	六	嘉永五・一	一八五二	
	(11)	縄夜業帳	六	六・一・吉日	一八五三	
	(12)	縄夜業帳	六	安政二・一・吉日	一八五五	
	(13)	縄夜業帳	六	五・一・吉日	一八五八	
	(14)	縄夜業貸付帳	六	万延二・一・吉日	一八六一	

47 縄なひ夜業帳(核町)

整理番号	整理枝番	史料名(内容)	形態数量	年代	西暦	作成
42	(95)	多賀大社御祭礼役割覚帳	八	万延二・六・八	一八六〇	庄屋源助
	(96)		七	文久一・四・二四	一八六一	
	(97)		七	二・四・一八	一八六二	庄屋勘兵衛
	(98)		七	三・四・一八	一八六三	
	(99)		七	元治一・四・二四	一八六四	庄屋勘兵衛
	(50)		七	二・四・一八	一八六五	庄屋源助
	(51)		七	慶応一・四・一六	一八六五	
	(52)		六	二・四・一七	一八六六	
	(53)		五	三・四・二三	一八六七	
	(54)		七	明治二・四・一六	一八六九	庄屋曾平
	(55)		七	三・四・二三	一八七〇	
	(56)		四	天保六・四・一一	一八三五	庄屋九郎右衛門
	(57)		六	一・一・四・二三	一八四〇	庄屋林右衛門
	(58)		六	嘉永三・四	一八五〇	庄屋半三郎



1 多賀共有文書

番号	整理番号	整理枝番	史料名(内容)	形態数量	年代	西曆	作成 人
56	(1)	(2)	地蔵堂賽銭帳	七	天保八・一・一〇 一一・一・二〇	一八三七 一八四一	林蔵・長次ほか一名 九郎右衛門ほか二名
"	"	"	地蔵堂賽銭帳綴(桜町)	七	四五・一・二〇 四四・一・二〇 四三・一・二〇 四二・一・二〇 四一・一・二〇 四〇・一・二〇 三九・一・二〇 三八・一・二〇 三七・一・二〇 三六・一・二〇 三五・一・二〇	一九二二 一九二一 一九二〇 一九〇九 一九〇八 一九〇七 一九〇六 一九〇五 一九〇四 一九〇三 一九〇二	
"	"	"	多賀講掛金帳	七	三九・一・二〇	一九〇六	
"	"	"	多賀講掛金及精算帳	七	三八・一・二〇	一九〇五	
"	"	"	"	七	三七・一・二〇	一九〇四	
"	"	"	"	一〇	三六・一・二〇	一九〇三	
"	"	"	"	一〇	三五・一・二〇	一九〇二	
"	"	"	"	九	四五・一・二〇	一九二二	
"	"	"	"	九	四四・一・二〇	一九二一	
"	"	"	"	〇	四三・一・二〇	一九二〇	
"	"	"	"	〇	四二・一・二〇	一九〇九	
"	"	"	"	〇	四一・一・二〇	一九〇八	
"	"	"	"	七	四〇・一・二〇	一九〇七	
"	"	"	"	七	三九・一・二〇	一九〇六	
"	"	"	"	一	三八・一・二〇	一九〇五	
"	"	"	"	一	三七・一・二〇	一九〇四	
"	"	"	"	一	三六・一・二〇	一九〇三	
"	"	"	"	一	三五・一・二〇	一九〇二	

番号	整理番号	整理枝番	史料名(内容)	形態数量	年代	西曆	作成 人
54	(25)	(25)	多賀講掛銭帳	五	明治二〇・一・二〇	一八八七	
"	"	"	"	六	二一・一・二〇	一八八八	
"	"	"	"	六	二二・一・二〇	一八八九	
"	"	"	"	六	二三・一・二〇	一八九〇	
"	"	"	"	六	二四・一・二〇	一八九一	
"	"	"	"	六	二五・一・二〇	一八九二	
"	"	"	"	五	二六・一・二〇	一八九三	
"	"	"	"	六	二七・一・二〇	一八九四	
"	"	"	"	五	二八・一・二〇	一八九五	
"	"	"	"	五	二九・一・二〇	一八九六	
"	"	"	"	八	三〇・一・二〇	一八九七	
"	"	"	"	八	三一・一・二〇	一八九八	
"	"	"	"	七	三二・一・二〇	一八九九	
"	"	"	"	七	三三・一・二〇	一九〇〇	
"	"	"	"	八	三四・一・二〇	一九〇一	



整理番号	整理枝番	史料名(内容)	形態数量	年代	西暦	作成
56	(3)	地藏講掛銭御散銭帳	七	天保一三・一・吉日	一八四二	長右衛門ほか二名
	(4)	地藏堂賽銭帳	七	〃 一五・一・吉日	一八四四	九郎介ほか二名
	(5)	〃	九	嘉永四・一・吉日	一八五一	利平・数平ほか一名
	(6)	地藏堂寛帳	一	安政三・一・吉日	一八五六	孫右衛門ほか二名
	(7)	地藏講寛帳	九	〃 五・一・吉日	一八五八	兵左衛門ほか二名
	(8)	地藏講散銭帳	八	〃 六・一・吉日	一八五九	彦治ほか一名
	(9)	地藏堂賽銭帳	一	文久四・一・吉日	一八六四	宗平ほか二名
	(10)	〃	一〇	慶応四・一・二〇	一八六八	重平ほか二名
	(11)	〃	九	明治四・一・二〇	一八七一	茂平ほか二名
	(12)	〃	八	〃 五・一・二〇	一八七二	源八ほか二名
	(13)	〃	六	〃 一〇・二	一八七七	西島平九郎ほか二名
	(14)	〃	八	〃 一・二	一八七八	竹中彦兵衛ほか二名
	(15)	〃	六	〃 一・二・吉日	一八七九	小菅源右衛門ほか
	(16)	〃	九	〃 一四・二・二	一八八一	田中清兵衛ほか二名
	(17)	〃	九	〃 一五・二・二	一八八二	安藤新七ほか二名

整理番号	整理枝番	史料名(内容)	形態数量	年代	西暦	作成
57	(1)	〃	五	〃	一八八三	岡嶋・遠藤ほか一名
	(2)	〃	九	〃 一六・一・七	一八八四	品位九平ほか二名
	(3)	〃	七	〃 一七・一・二三	一八八五	西嶋平九郎ほか二名
	(4)	〃	八	〃 一八・一・二〇	一八八六	源平ほか二名
	(5)	〃	九	〃 一九・一・二〇	一八八七	松宮孫十郎ほか二名
	(6)	〃	七	〃 二〇・一・二〇	一八八八	安藤新七ほか二名
	(7)	〃	七	〃 二一・一・二〇	一八八九	田中巳之吉ほか二名
	(8)	〃	七	〃 二二・一・二〇	一八九〇	小菅藤兵衛ほか二名
	(9)	〃	七	〃 二三・一・二〇	一八九三	辰巳和直ほか二名
	(10)	〃	九	〃 二六・一・二〇	一八九四	山地平右衛門ほか
	(11)	〃	〇	〃 二七・一・二〇	一八九五	岡嶋源太郎ほか二名
	(12)	〃	〇	〃 二八・一・二〇	一八九六	品居九右衛門
	(13)	〃	〇	〃 二九・一・二〇	一八九七	品居九右衛門ほか二名
	(14)	〃	〇	〃 三〇・一・二〇	一八九七	小菅源平ほか二名
	(15)	〃	一	〃 三一・一・二〇	一八九八	小菅源平ほか二名
	(16)	〃	一	〃 三二・一・二〇	一八九九	松宮孫十郎ほか二名
	(17)	〃	一	〃 三三・一・二〇	一九〇〇	西嶋京太郎ほか二名
	(18)	〃	一	〃 三四・一・二〇	一九〇一	安藤新七ほか二名

整理番号	整理枝番	史料名(内容)	形態数量	年代	西暦	作成人
56	(35)	地藏堂寶銭帳	五	明治三五・一・二〇	一九〇二	田中巴之吉ほか二名
"	"	"	七	"	一九〇三	小菅与惣松ほか二名
"	"	"	八	三七・一・二〇	一九〇四	小菅竹次郎ほか二名
"	"	"	七	三八・一・二〇	一九〇五	辰巳志田ほか二名
"	"	"	六	三九・一・二〇	一九〇六	西嶋いくほか二名
"	"	"	七	四〇・一・二〇	一九〇七	安藤留吉ほか二名
"	"	"	六	四一・一・二〇	一九〇八	
"	"	"	八	四二・一・二〇	一九〇九	竹中彦平ほか二名
"	"	"	六	四三・一・二〇	一九一〇	
"	"	"	六	四四・一・二〇	一九一一	
"	"	"	七	四五・一・二〇	一九一二	林駒三郎ほか一名

## 2 松宮正宜家文書(多賀)

当家には近世の御用金高割帳や明治初期の戸籍帳と油業に関する江戸時代の文書がある。

文化文政期の「琉球人参向人馬高割帳」や「朝鮮人來聘諸入用御用金高割」などの琉球人参向や朝鮮使節の諸経費の高割は、他村では見かけない文書である。

明治二年(一八六九)彦根藩の指示による「多賀村

戸籍下」がある。これによると世帯数一二七のうち、農業一〇二戸、商工業八戸、不明一七戸である。農業一〇二戸中二九戸は兼業で一八種の商工業に従事している。下巻のみなので村全体を明らかにできないが、次表のとおりである。

表のうち、札配りが本業三戸、副業として三戸ある。この札配りは多賀大社の不動院、般若院、観音院の各僧坊に属して、諸国に向向して神札を配布し、多賀大社の信仰を広めていた坊人のことであろう。前掲多賀共有文書目録二三番、二五番の安永三年(一七七

多賀村各戸の本業と副業(部分)世帯数 127

本業	副業	戸
農	業	102
札配	り	3
小間	物	2
杓子	作	1
左	官	1
煮	売	1
不	明	17
計		127
農家の副業		戸
大	工	5
札	配	3
艘	頭	2
白	米	2
荒	物	2
木	挽	2
油	絞	2
桶	屋	1
疊	職	1
形	職	1
味	職	1
塩	職	1
糸	販	1
木	糖	1
小	商	1
医	商	1
計	者	1
計		29

(明治二年「多賀村戸籍下」より)